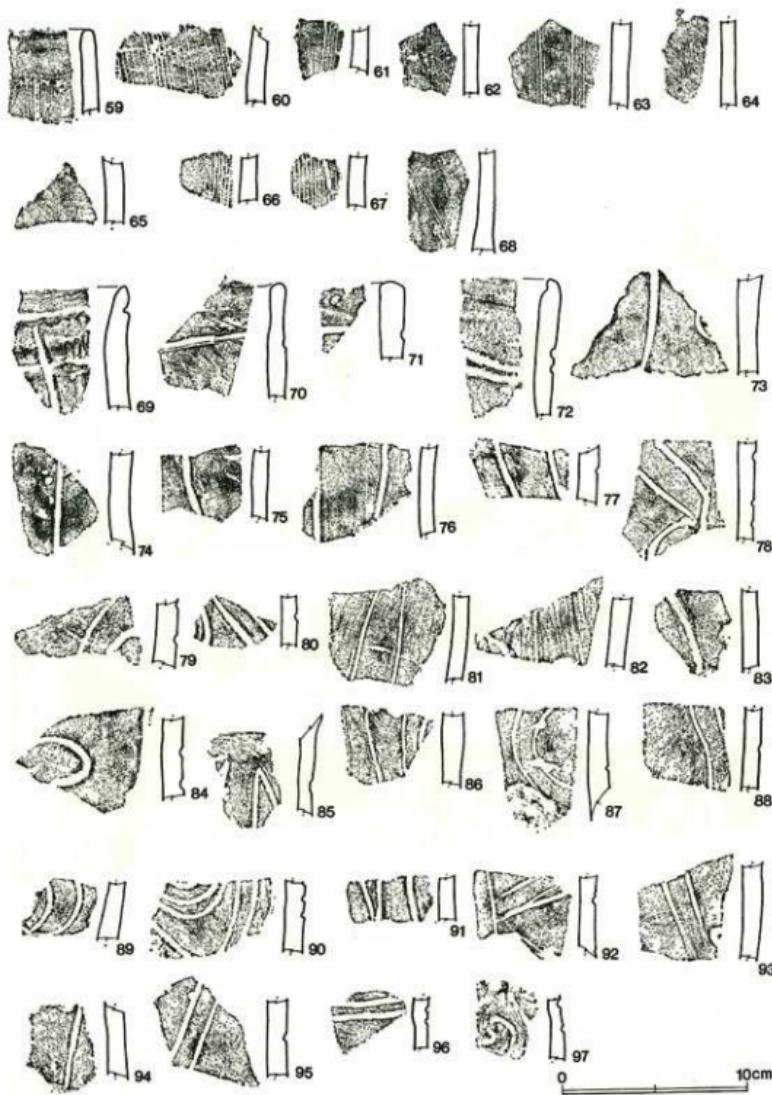
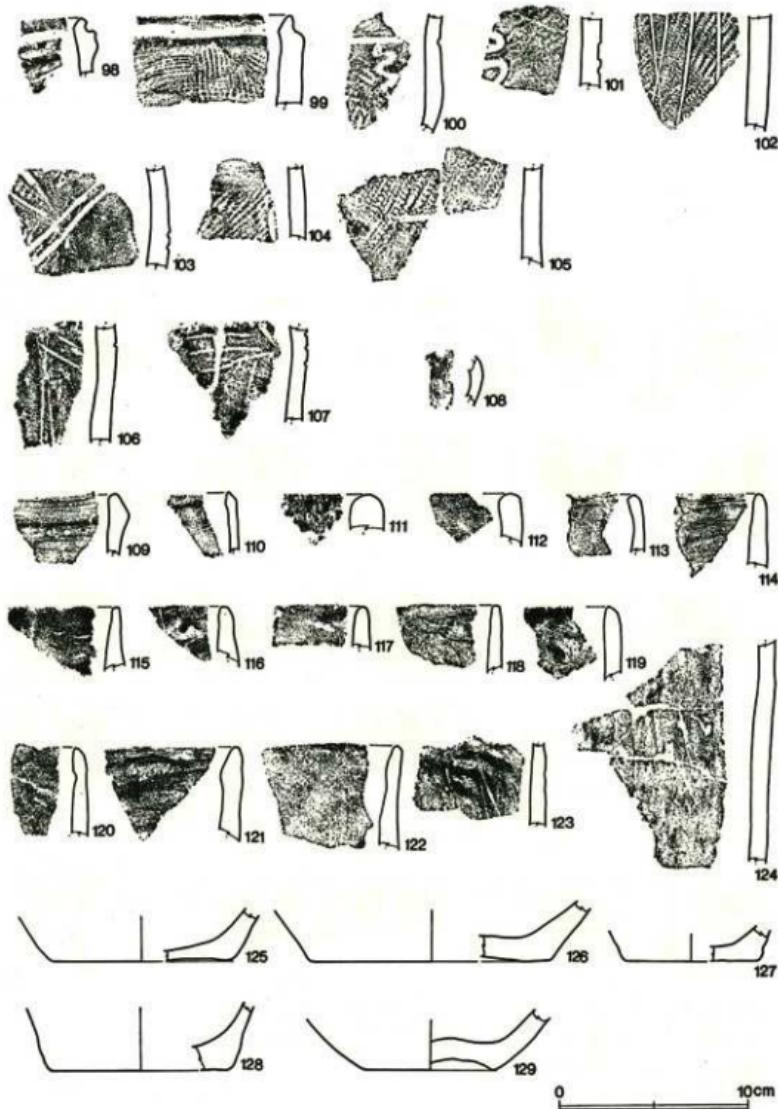


第51圖 第11號住居跡出土土器拓影圖（2）



第52図 第11号住居跡出土土器拓影図（3）



第53図 第11号住居跡出土土器拓影図(4)

状で本類としておく。

第12号住居跡出土土器（第54図、第55図）

〔分布状況〕 ①分布は全体に散漫である。②壁下、入口部には遺物が少ない。③第13号住居跡壁外は、リング状に遺物分布が少ない。

〔構成状況〕 ①大きさは、 $20\text{cm} \times 20\text{cm}$ をピークとし、 $30\text{cm} \times 30\text{cm}$ 、 $20\text{cm} \times 30\text{cm}$ が続く。②重量は、 $0 \sim 9\text{g}$ がピークで暫時減少する。③カーボンの付着する土器片は、27片で割合は低い。④時期は4期が多く、3期が続く。⑤手法は9が多く6、3と続く。

〔土器分類〕

第1類（1～4） C→J 手法。1、2は波状口縁で内側に「く」字状に肥厚、内彎する。1は口縁部無文帯を有し、以下に横走する2本のR間に2列の刺突列を配する。2は波状口縁頂部に隆帯による「8」字状の文様が配されるものと思われる。

第2類（5） C→J 手法。繩紋が沈線をつぶしている。

第5類（6～9、16） J→C 研磨手法。I・文様帯を有する。6、7は1対の盲孔を中心に横走する沈線、(R→Ct)によってI・文様帯を形成する。9は裏面沈線を配する浅鉢である。

第6類（10～16、17） J→C 手法。繩紋を地文として、1本描き沈線文を配する。17は、くし状工具による沈線文である。

第9類（18～23） C 手法。1本描き沈線文で施文後、研磨が行なわれる。

第13号住居跡出土土器（第56図、第57図）

〔出土状況〕 ①全体に出土状況は散漫である。②西側壁下にわずかに集中部分があるが、第12号住居跡と連動しており、流れ込みと思われる。③中央部を西一東にかけて、ベルト状に無遺物帶がある。④壁下、入口部は遺物が少ない。

〔構成状況〕 ①大きさは $20\text{cm} \times 20\text{cm}$ がピークで、 $20\text{cm} \times 30\text{cm}$ 、 $30\text{cm} \times 30\text{cm}$ が続く。②重量は、 $0 \sim 9\text{g}$ をピークとし暫時減少する。③カーボンの付着する土器片は48片出土している。④時期は4期がピークで、3期が続く。⑤手法は、9が多く、6、3と続く。

〔土器分類〕

第1類（1、2） R→J 手法。2は波状口縁頂部で貫通孔を有し、垂下する「8」字状の隆起帯文を持つ。

第2類（3、4） C→J 手法。3は区画する沈線がかなり太く、充填繩紋もかなり細かい。

第3類（5、6） C→Ct 手法。区画内に1列の刺突文を配する。

第5類（21、22） 胸部文様は不明。I・文様帯を有す点本類としておく。21は、口唇部に一列の刺突列を有する。

第6類（10～14） J→C 手法。10は「く」字状に内彎する口縁部を有する。14は、深鉢Bの屈曲部で「8」字状文が配される。

第9類（15～20） C 手法。15は、口縁部無文帯を形成せず、直接沈線文が配される。他は1本描き沈線文を配する。

第8類（24～29） 無文のもの。いざれも口縁部片である。

第14号住居跡出土土器（第58図、第59図）

〔分布状況〕 ①全体に散漫な出土状況である。②全体的に中央～西側にかけて遺物は少ない。③壁下、入口部には遺物が少ない。

〔構成状況〕 ①大きさは20cm×20cmがピークで、30cm×30cm、20cm×30cmが続く。②重量は、0～9gが多く暫時減少するが40g～49g付近で若干のもたつきがある。③カーボンが付着する土器片は33片と多くかなりの割合である。④時期は、3期、4期が多く他は少ない。⑤手法は、9が多く、3、6が続く。

〔土器分類〕

第1類（1、2） R→J手法。1はかなり厚く、大型の盲孔を中心として「8」字状の隆帯が加わるものと思われる。2は貫通孔を有し、同様な隆帯が配される。

第3類（4～9） C→Ct手法。4は口縁部片で、口縁部に若干の無文部を有し、以下にくし状工具による短沈線状の刺突を充填する。5～7、9は、区画内に1列の刺突文を配する。8は、複列の充填刺突である。

第5類（10～15） J→C→研磨手法。10は貫通孔を有す把手が配され、盲孔と（R→Ct）によるJ・文様帶が配される。11は深鉢Bの屈曲部で「J」字状部分が磨消される。12は波状口縁頭部に貫通孔がある。13、14は、沈線によるJ・文様帶を有する。

第9類（16～21） C手法。16、19は、口縁下に無文部を配する事なくモチーフが描かれる。

第15号住居跡出土土器（第60図、第61図）

〔分布状況〕 ①出土量は多くないが、住居跡中央部に集中する傾向がある。②南側～西側にかけて、分布の希薄な所がある。③第2号住居の壁外はリング状に無遺物層になる。

〔構成状況〕 ①大きさは20cm×20cmがピークで、30cm×30cm、20cm×30cmが続く。②重量は、0～9gが最大で暫時減少する。③カーボンの付着する土器は30片である。④時期は、4期が最大で、3期が続く。⑤手法は、9が多く、3、2が続く、5、6は少ない。

〔土器分類〕

第1類（1～4） R→J手法。2は、無文部が横走する。3は（R→Ct）が横位に配される。

第2類（5～9） C→J手法。6は、波状口縁で細い繩紋帶が頭部方向に持ち上がる。

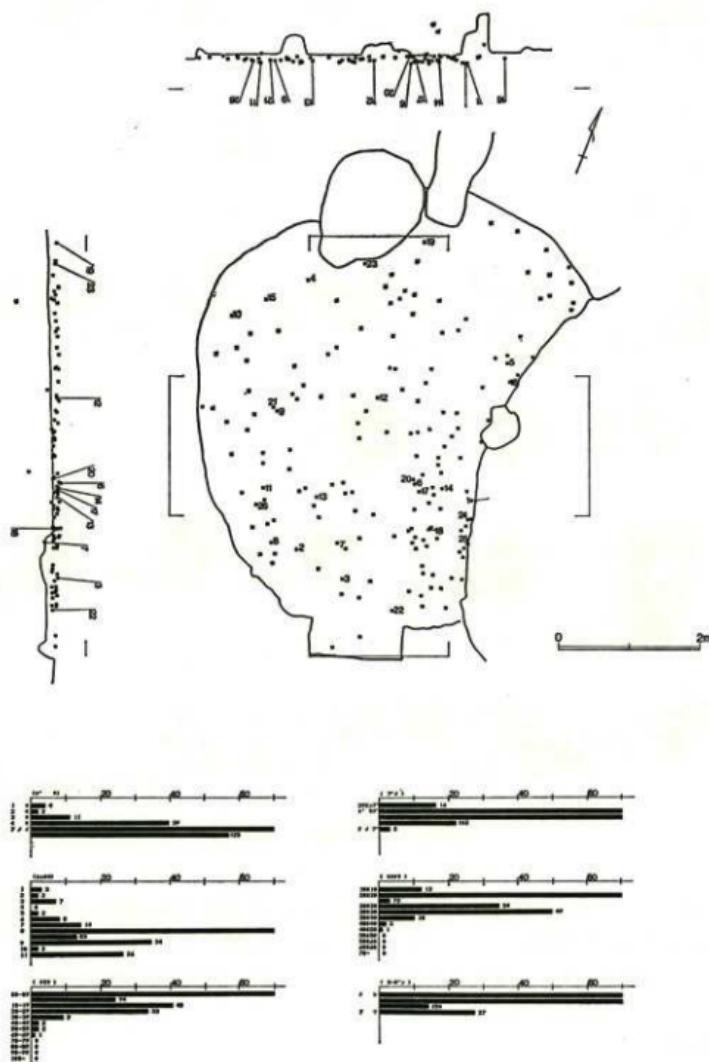
第3類（10～15） C→Ct手法。10は、内側に肥厚する断面形状を有する。他は、区画内に1列の刺突文を配する。

第9類（16、17、19、21～28） C手法。16、17は、くし状工具に沈線を密に配する。他は1本描き沈線文である。

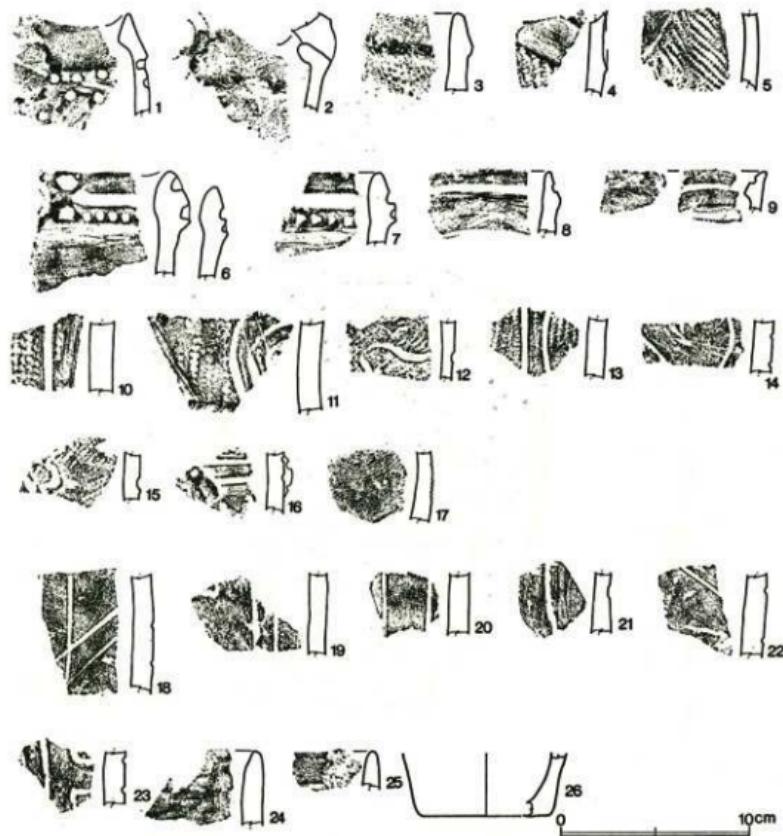
18は、深鉢Bの屈曲部で「8」字文が入る。20は、C→J I型で2～3本沈線間に繩紋が充填される。29～31は8類、32は7類。

第16号住居跡出土土器（第62図、第63図）

〔分布状況〕 ①特に集中する部分はないが、全体として中心部から北側にかけて多く西側には少ない。②第14号住居跡の壁外は、遺物の少ない部分がリング状に広がる。③顕著でないが壁下の遺物は少ない傾向にある。入口張り出し部も同様である。



第54図 第12号住居跡出土土器分布図・構成表



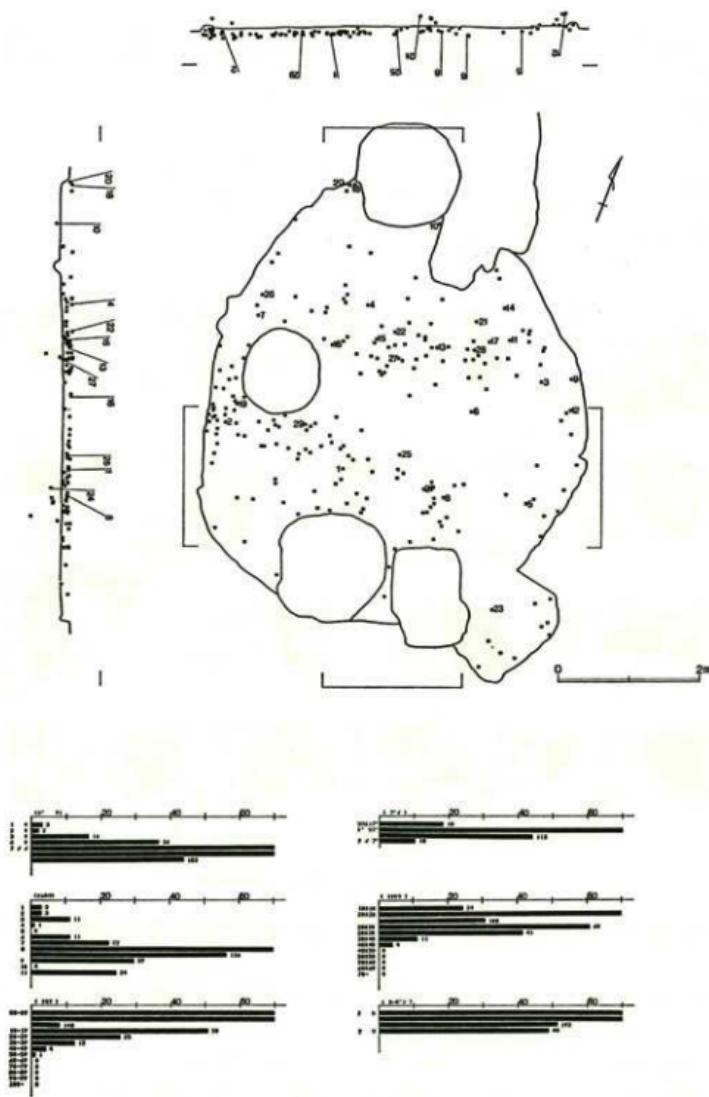
第55図】[第12号住居跡出土土器拓影図

〔構成状況〕 ①大きさは、 $20\text{cm} \times 20\text{cm}$ が特に多く、 $30\text{cm} \times 30\text{cm}$ 、 $20\text{cm} \times 30\text{cm}$ が続く。②重量は、 $0 \sim 9\text{ g}$ がピークで暫時減少する。③カーボンの付着する土器片は36片で少ない。④時期は、4期が多く、暫時減少する。⑤手法は、9が多く、6、2と続く。9を除外すれば、2がピークである。

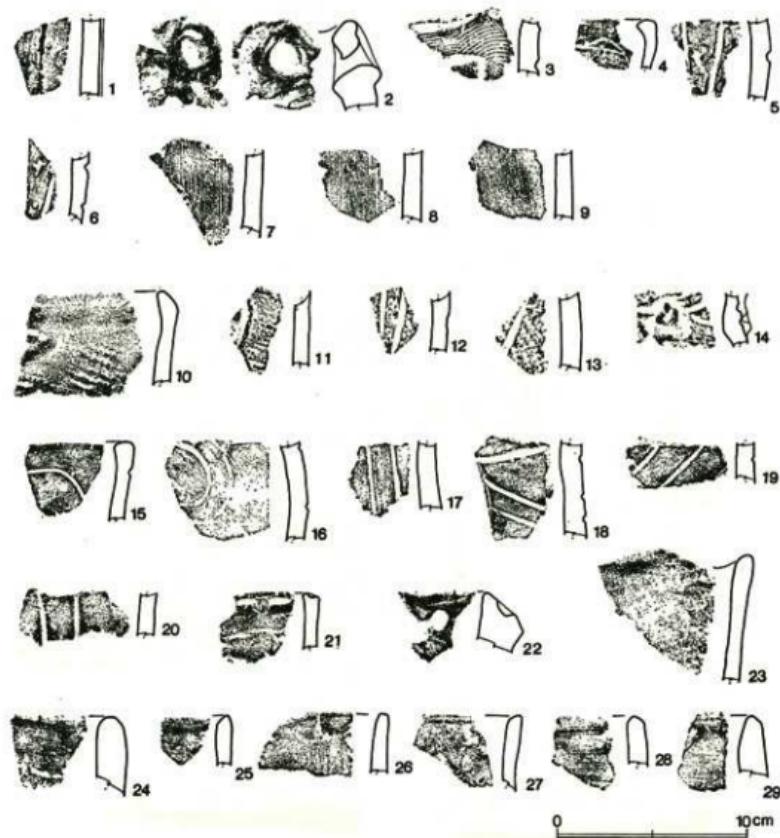
〔土器分類〕

第1類（1～5） R→J 手法。2は、横位の微隆起線で口縁部無文部を区画し、以下にC→J手法を持つ。

第2類（6～15、20） C→J 手法。6は波状口縁であり、口縁直下に網紋帯が配される。9、



第56图 第13号住居跡出土土器分布図・構成表



第57図 第13号住居跡出土土器拓影図

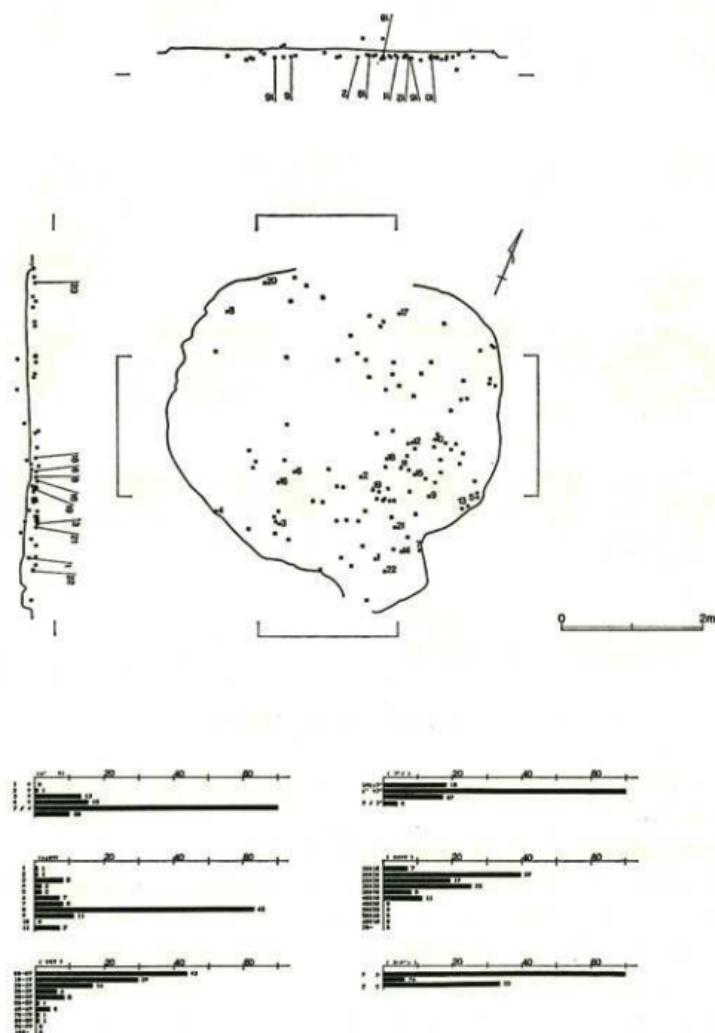
11は区画沈線がかなり広く、繩紋も細かい。13は付加条的繩紋である。20は口唇部に沈線が2条配される。

第5類 (21, 22, 24, 26) J→C→研磨手法。21は、狹少な口縁部無文帶を有し、蛇行部が磨消される。24は多条沈線間の磨消である。

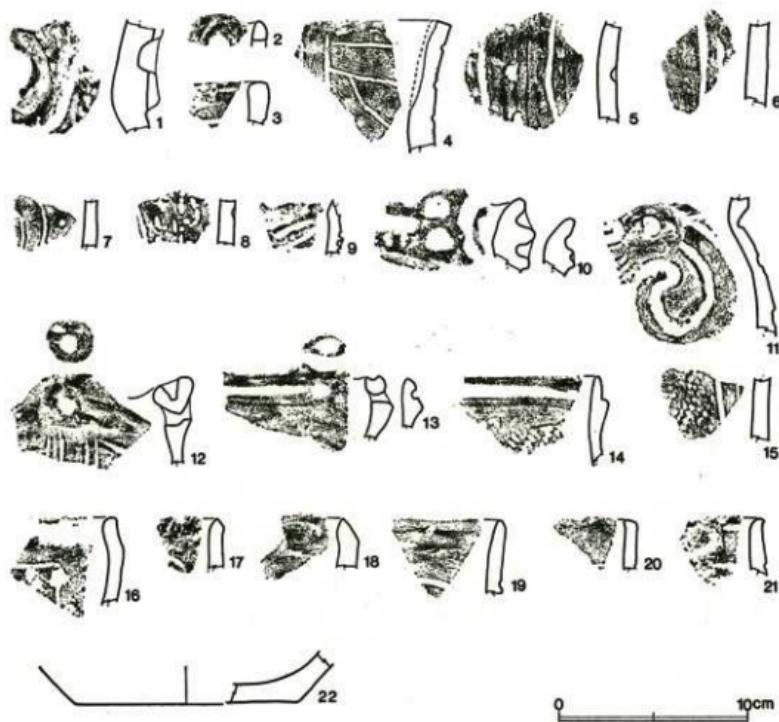
第6類 (23, 25) J→C手法。繩紋を地文として蛇行文が配される。

第9類 (27~35) C手法。27は口縁部で盲孔と沈線によるI・文様帶を配する。28, 29は波頂部に盲孔が配される。32は、無文帶を形成せずに直接文様が配される。

第18号住居跡出土土器 (第65図)



第58図 第14号住居跡出土土器分布図・構成表



第59図 第14号住居跡出土土器拓影図

出土量は少ない。1、2は第2類。3は第3類。4～6は第9類。4はくし状工具による施文で密に配される。

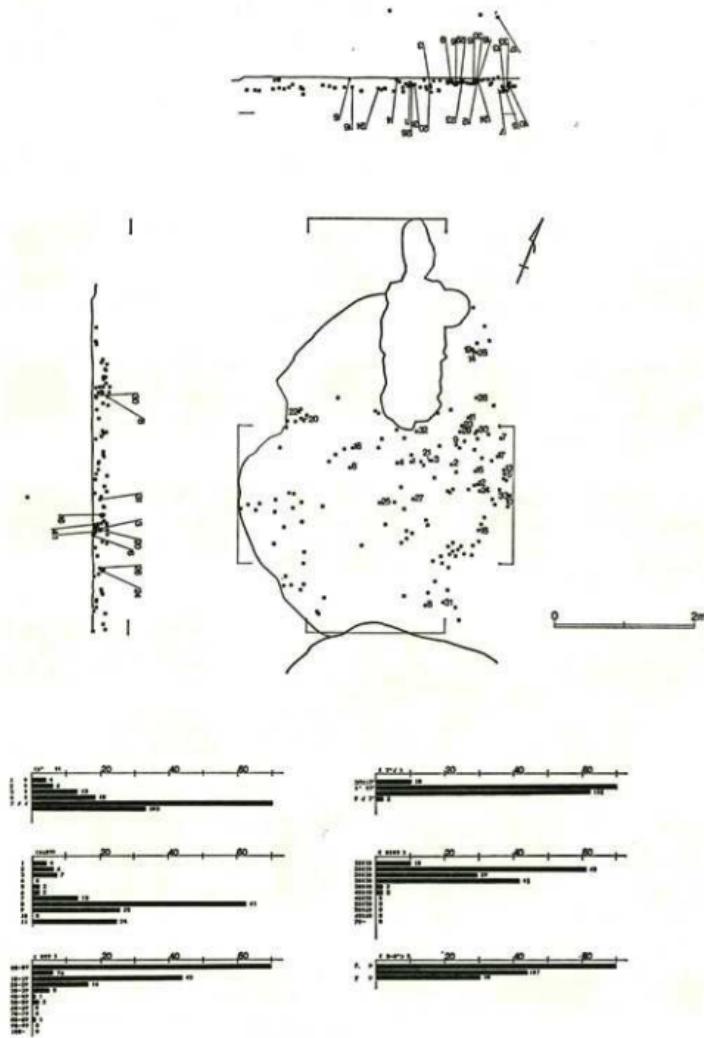
第19号住居跡出土土器（第64図、第65図、第66図、第104図3）

【分布状況】 ①かなり多量な土器片が出土している。②炉址を中心とした住居跡中央部に集中部分がある。③壁下には概して遺物が少ない。④西側に遺物が少ない部分が認められる。

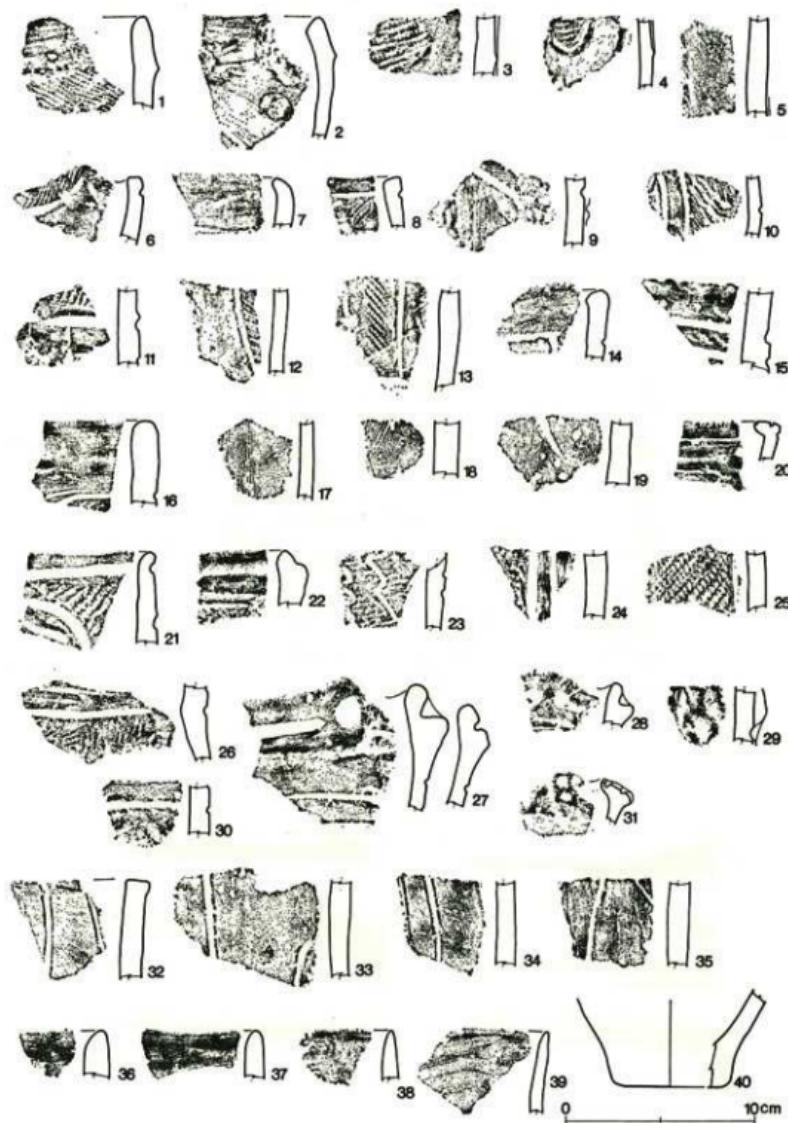
【構成状況】 ①大きさは、 $20\text{cm} \times 20\text{cm}$ をピークとし、 $30\text{cm} \times 30\text{cm}$ 、 $20\text{cm} \times 30\text{cm}$ が続く。②重量は、0～9 gがピークであり暫時減少する。③カーボンの付着する土器片は、71片認められた。④時期は、1期、2期がほぼ同量で、3、4期が続く。⑤手法も、④と連動して1、2が多く3～6、9は少ない。

【土器分類】

第1類（1～12、第103図） R→J手法。1～5は口縁部片。1、2、5は内彎する口縁部を



第60図 第15号住居跡出土土器分布図・構成表



第61図 第15号住居跡出土土器拓影図

有し、口縁部無文帯が配される。3、4は同一個体。3は、縄紋部が持ち上がって口唇部まで達し山形を呈する。6～12は胴部片。12は、区画隆線が(R→Ct)であり特異である。第104図3は、小形で内彎する臺で口縁部に2対の貫通する小突起を有する。小突起間に4単位の渦文が配される。渦文の中心部4ヶ所が突出し、上面から見ると四角形を呈する。朱彩されている。

第2類(13～31) C→J手法。13は梢円文が配される。15は内彎する口縁部を有し、口縁直下から縄紋帯があり「J」字状の文様が垂下する。14、16、17、19は、口縁部無文帯が配される。18、20～27、29～31は胴部片で渦文に近いモチーフが配されるものと思われる。28は横位の縄紋帯が、31は(R→Ct)が、垂下する。

第3類(32～34) C→Ct手法。32は短沈線状の刺突。34は区画に棒状工具による刺突を用い、くし状工具による押し引き状の刺突を配する。

第4類(35) Ct手法。区画されない単列の刺突が垂下する。刺突は角状を呈する。

第9類(36、37) C手法。36は口縁に沈線文を配しI・文様帶とする。

36～42は第8類である。口縁部無文のもので一応本類としておく。43～46は縄紋のみのものである。44～46は細かい縄紋、44、46は間隔のあいた縱回転の縄紋である。

第20号住居跡出土土器(第68図)

遺物はきわめて少ない。1は、(R→C)手法が認められ第5類であろう。3は、口唇部に沈線が配され、J→C手法による蛇行文が配される。第6類である。2は第9類である。

第21号住居跡出土土器(第67図、第68図、第104図4)

〔分布状況〕 ①遺物が少ない点と攪乱がかなり入っている点分析を困難にしているが、住居跡北半部、炉址を中心とした部分に集中する部分が認められる。②概して、南側、西側には遺物が少ない。③入口部付近も同様である。

〔構成状況〕 ①大きさは、20cm×20cmがピークで他がそれに続く。②重量は、0～9gがピークで暫時減少する。③カーボンが付着する土器は21片確認された。④時期は、3期、4期が多い。⑤手法は、9が多く、3が続く。

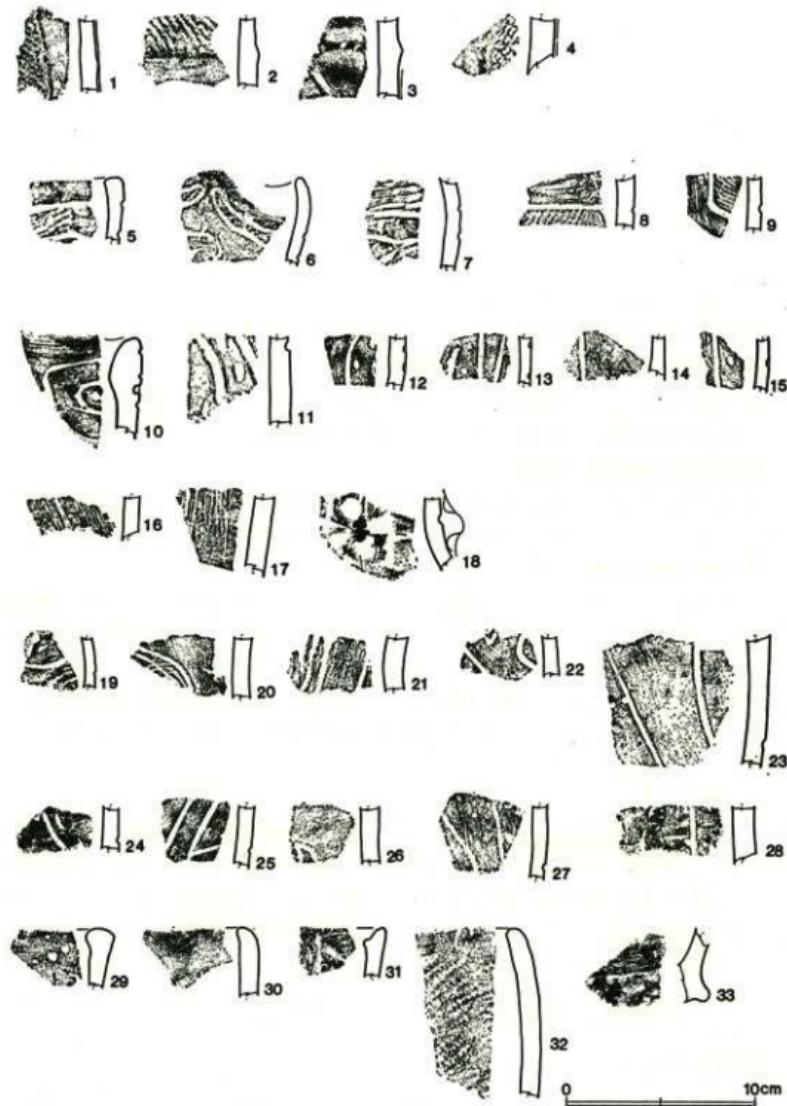
〔土器分類〕

1～7、15は地点記載土器。8～14は覆土一括の土器片である。8は、第1類で、区画隆線下はC→J手法が配されるものと思われる。9、12はC→J手法の第2類土器である。1、2はC→Ct手法で区画内に1列の刺突が配される。3、6は第5類である。7は第6類J→C手法である。5、10～12は第9類、C手法である。第104図4は、大形の深鉢である。口径一約36.8cm、現高一42cm前後である。口縁部は若干外反するものと思われる。横走する1条の沈線で口縁部無文帯を区画し、以下に沈線文を配する。沈線文は8～12本前後のくし状工具により、間隔を開けて縦位に施文される。

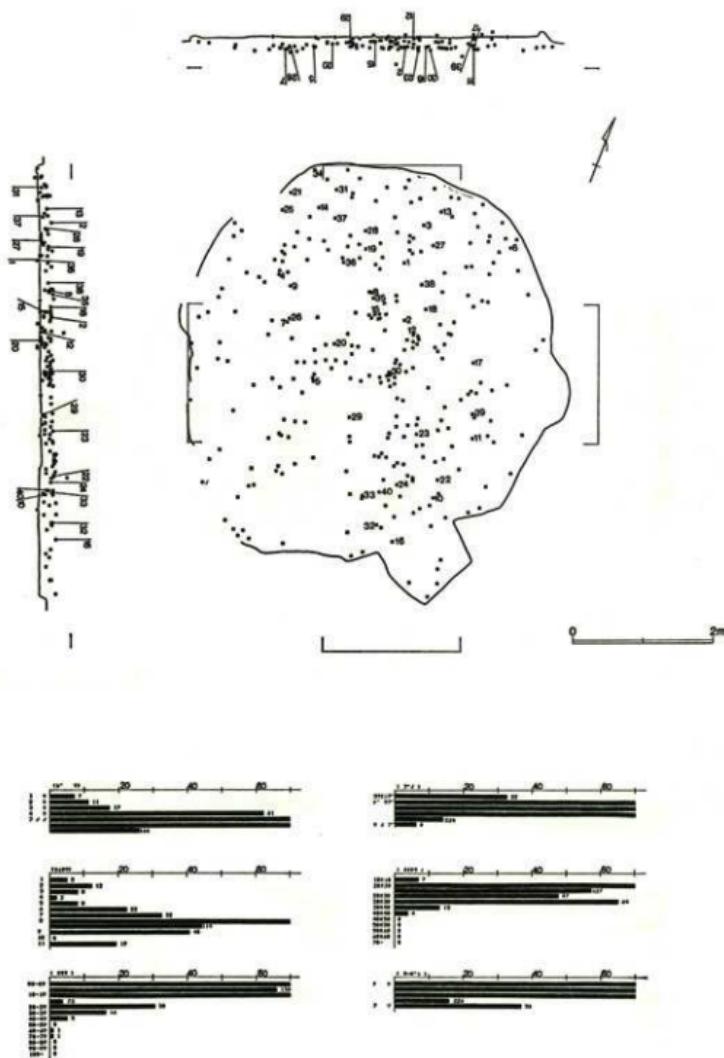
第22号住居跡出土土器(第68図、第69図)

〔出土状況〕 ①全体に遺物量が少なく、攪乱もかなり入るため傾向をつかみにくいが、概して中央部に集中する。②壁下、入口部には少ない。

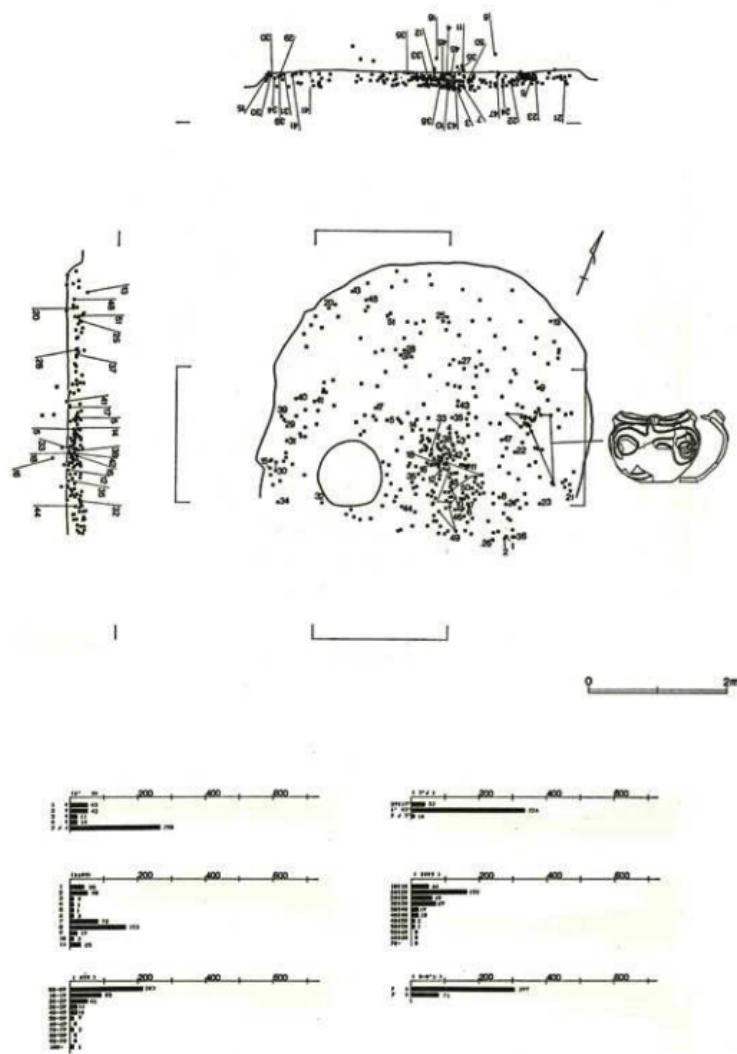
〔構成状況〕 ①大きさは、20cm×20cmがピークで20cm×30cm、30cm×30cmが続く。②重量は、



第62圖 第16號住居跡出土土器拓影圖



第63図 第16号住居跡出土土器分布図・構成表

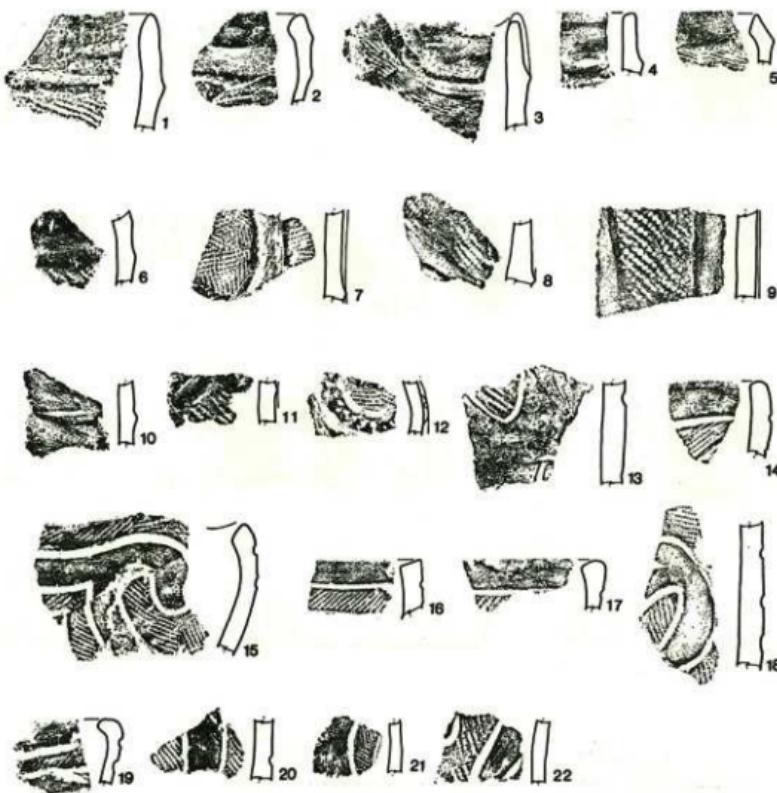


第64図 第19号住居跡出土土器分布図・構成表

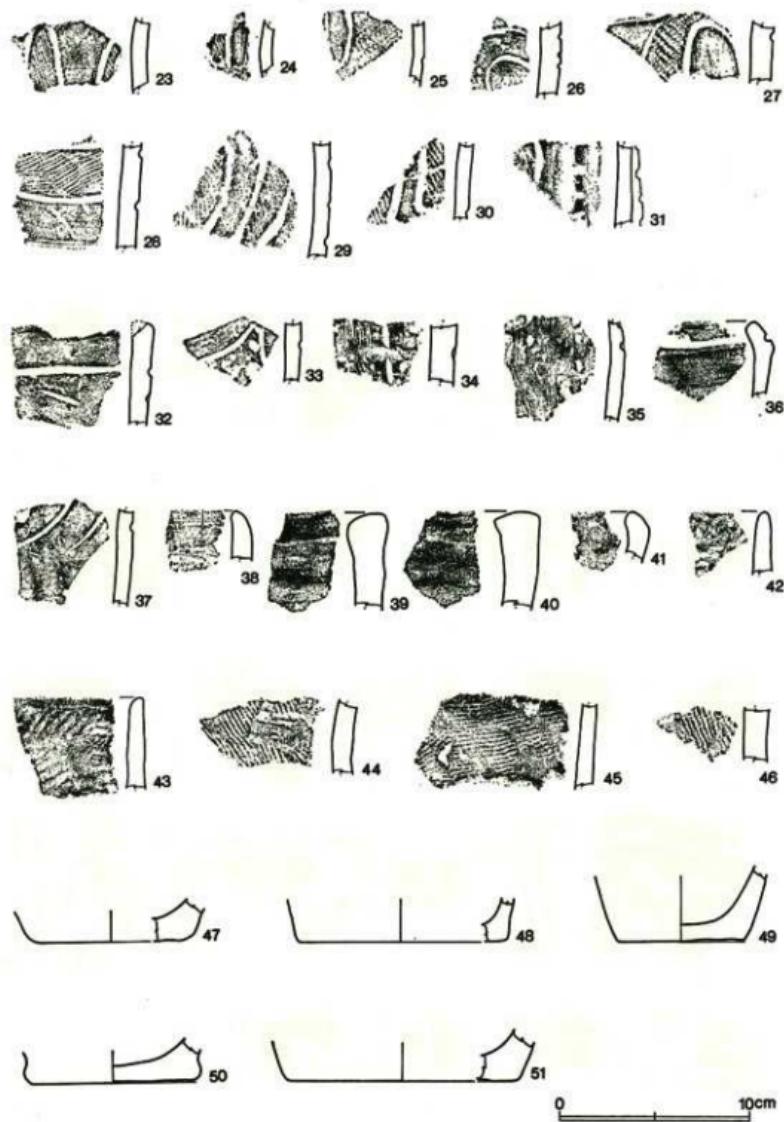
第18号住居跡



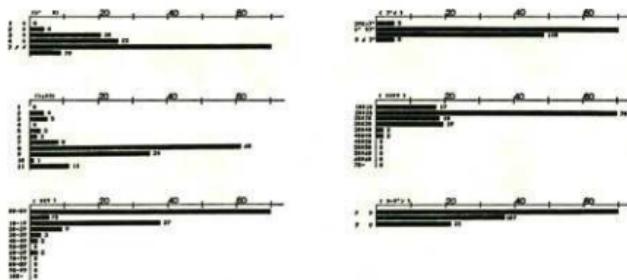
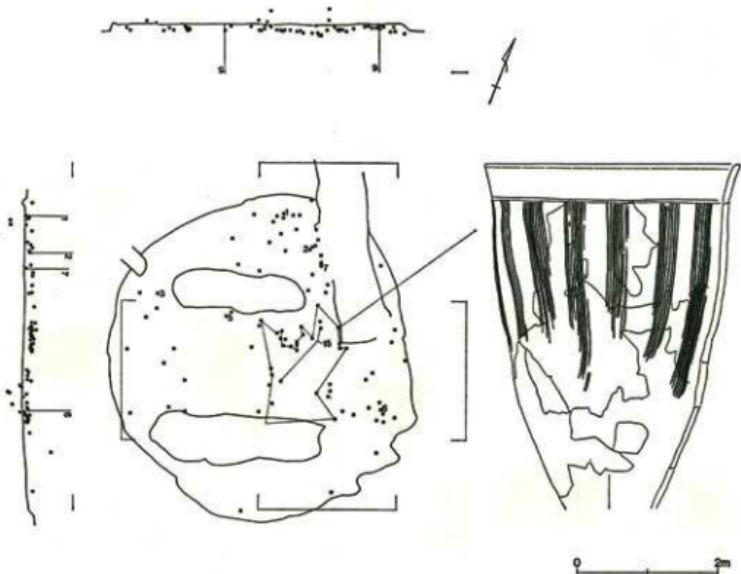
第19号住居跡



第65図 第18号住居跡、第19号住居跡（1）出土土器拓影図



第66図 第19号住居跡出土土器拓影図（2）

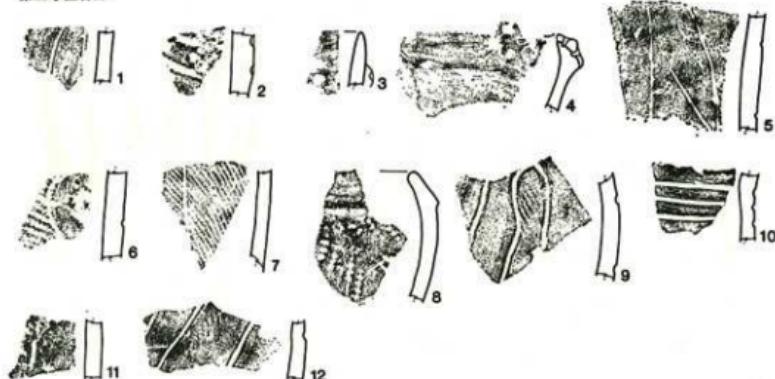


第67図 第21号住居跡出土土器分布図・構成表

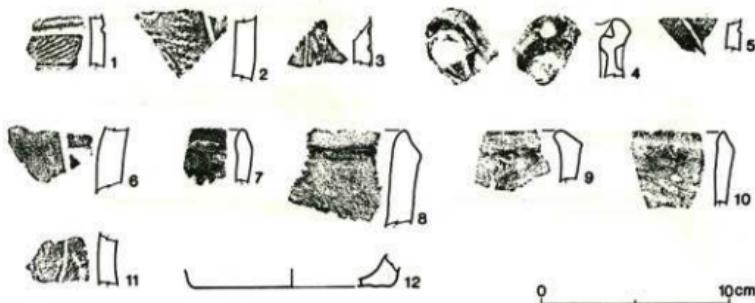
第20号住居跡



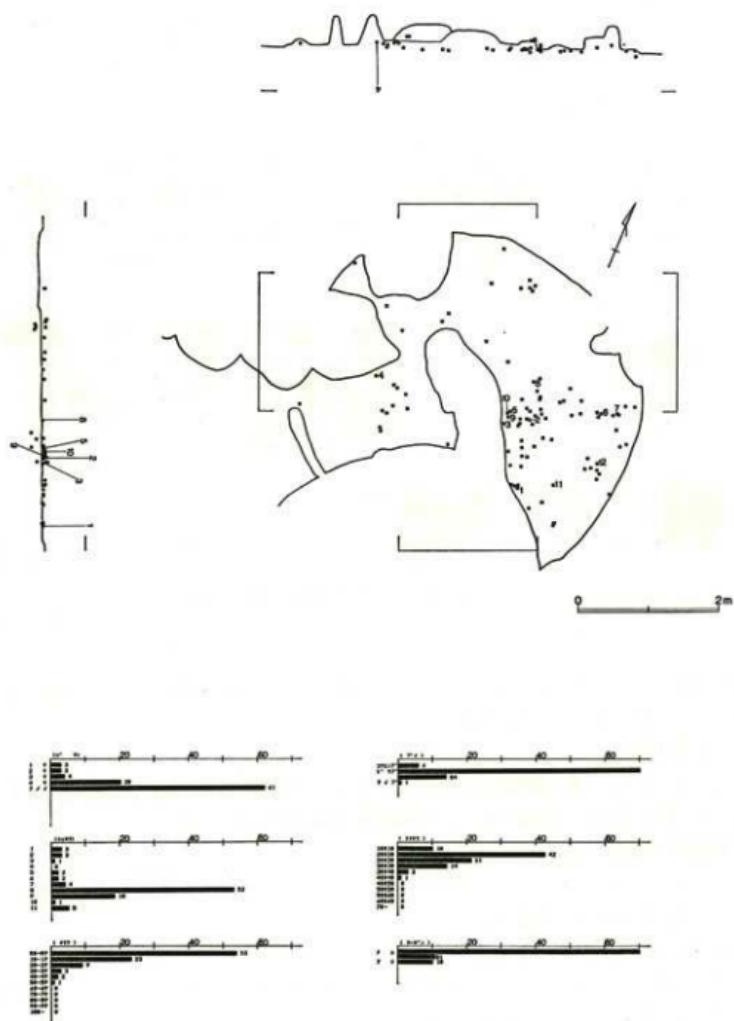
第21号住居跡



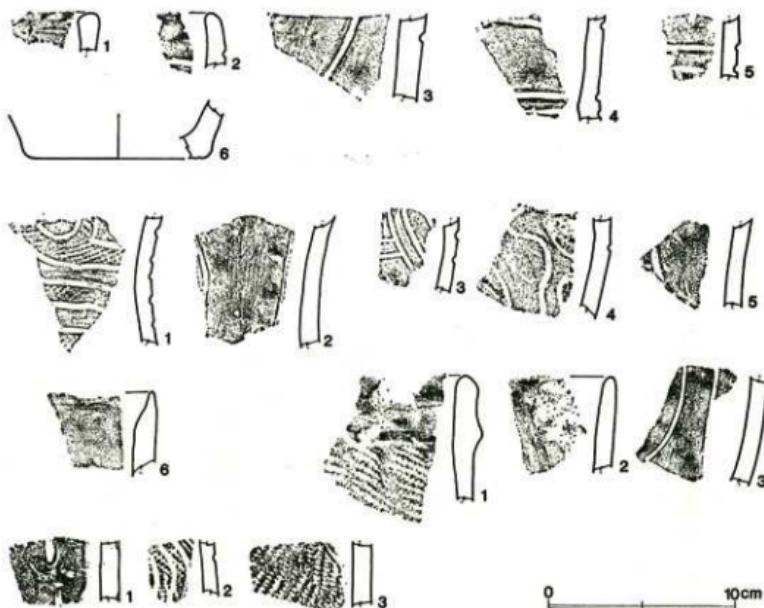
第22号住居跡



第68図 第20号～22号住居跡出土土器拓影図



第69圖 第22號住居跡出土土器分布圖・構成表



第70図 第23号～27号住居跡出土土器拓影図

0～9 g がピークで暫時減少する。③カーボンの付着する土器片は10片確認した。④時期は、4期が多い。⑤手法は、9が多く6が続く。

〔土器分類〕

1、2はC→J手法の第2類。3は第3類。4は盲孔及び隆起線文の加わる第5類と思われる。5、6、11はC手法の第9類である。8～10は無文口縁部である。

第23号住居跡出土土器（第70図）

出土遺物はかなり少ない。1は、無文口縁部。2～5はC手法である。1は、口縁部無文帶を有する。4、5は沈線文が横走する。

第24号住居跡出土土器（第70図）

出土遺物はかなり少ない。1は第2類で横走する繩紋帯が配され「O」字状のモチーフが付するものと思われる。2～5は、C手法である。

第25号住居跡出土土器（第70図）

出土遺物はきわめて少ない。1は、口縁部無文帶を有するC→J手法。3はC手法である。

第26号住居跡出土土器（第70図）

出土遺物はかなり少ない。1は、C→Ct手法と想定され第3類である。2、3は、J→C手法で第6類である。

2-2 土壙出土土器

第2号土壙（第71図、第98図）

〔分布状況〕 ①出土量が少ないが、中央部に集まる。②上層と下層に2分されるが型式的差異は確認されない。

〔土器分類〕 1はC→Ct手法の第3類。2、3はJ→C手法の第6類である。

第3号土壙（第71図、第98図）

〔分布状況〕 ①分布は、中央部に集まる。②垂直分布は上層と下層とに2分される。型式的分層は出来ない。

〔土器分類〕 1はR→J手法の第1類。2、3はC→J手法であり、2は波状口縁頂部に網紋部が山形に持ち上がる。4はC→Ct手法で区画内に単列刺突が配される。5～8はC手法。6～8はくし状工具による継位沈線文である。

第4号土壙（第71図、第98図）

〔分布状況〕 ①量は多くないが3グループに分かれて分布する。②垂直分布は、床面から浮いており、同一層序に乗る。

〔土器分類〕 1、4はC→J手法の第2類。2はC→Ct手法の第3類。3は細い沈線を格子状に配する。

第5号土壙（第72図、第98図、第105図1、第2表）

〔分布状況〕 ①土壙中央部に集中する。②垂直分布は、上、下2層に分離する。上層はレンズ状の分布、下層は、「団子」状に分布する。③第1類～4類は上層に、6類、9類は両層に分布する。

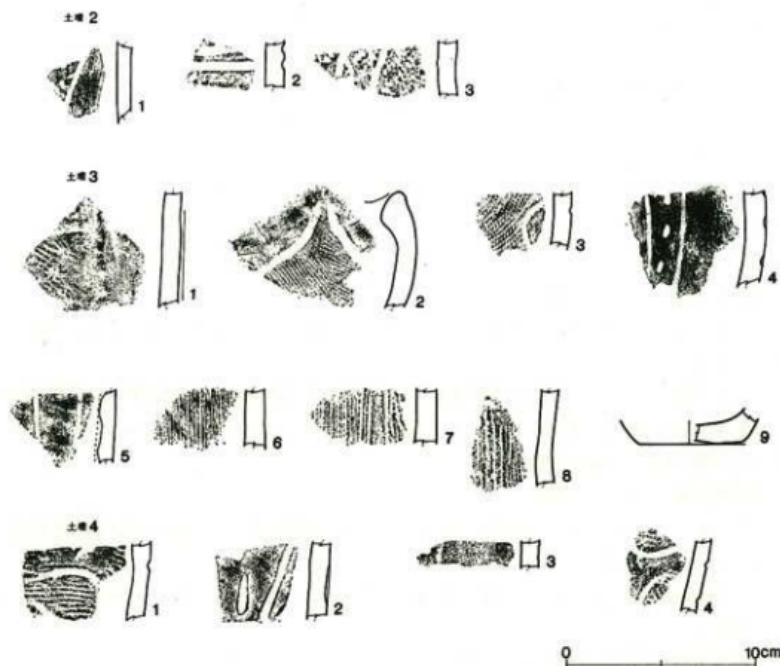
〔構成状況〕 ①大きさは、20cm×20cm、30cm×30cmが多く、20cm×30cm、40cm×40cmが続く。40cm×40cmが多い点特色である。②重量は、0～9gがピークで暫時減少する。③カーボンの付着する土器片は44片と多く、約5割である。④時期は、4期が突出して多い。⑤手法は、9が多く、6が続く。

〔土器分類〕

1は、R→J手法第1類、2は第2類である。3、4はC→Ct手法の第3類。3は口唇部に沈線が配される。6～8は、I・文様帶、把手形状等より5類としておく。

第6類（9～14、第105図1） J→C手法。9、第105図1は沈線文によるI・文様帶を配する。「U」字状のモチーフが上・下2段に配されるものと思われる。10も沈線によるI・文様帶を配する。一本描き沈線による。11、12は、沈線によるI・文様帶を有する。

第9類（15～23） C手法。15は上端に刺突列が入る。16は、上端から沈線を垂下させる。18～20は、点状の剥落が激しい。



第71図 土壌出土土器拓影図（1）第2号～4号土壌

24は、繩紋のみの第7類、25～27は、口縁部無文部である。

第6号土壌（第73図、第98図）

【分布状況】 ①は北側、南側の2つのグループに分かれる。②垂直分布での分化はできない。

【土器分類】 1は、R→J手法で第1類である。2は、細かい繩紋を縦回転させている。

第7号土壌（第73図）

風倒木痕である。第6号住居跡、土壌を崩壊させており、遺物の出土も比較的多いため、土器だけ掲載しておく。

1はR→J手法の第1類。2～6はC→J手法の第2類である。6は（R→Ct）で縦位分割が計られる。7はC→Ct手法。8はJ→C→研磨手法の第5類である。11は、J→C手法で縦位の蛇行文が配される。9、12～16はC手法。9は、くし状工具によって縦位の連鎖文を配する。17は屈曲部にCtが認められるが帰属不明。18～22は、口縁部無文帯を有する。

第9号土壌（第74図、第98図）

【分布状況】 ①分布は散漫である。②垂直分布も均一である。

〔土器分類〕 1～3はC→J手法。3は区画沈線を網紋が明瞭に切っている。4、5はC手法。6は口縁部無文帶を沈線によって区画する。

第11号土壤（第74図、第98図、第105図3）

〔分布状況〕 ①土壤中央から北西にかけて分布する。②垂直分布は、上、下2つのレベルに分布する。上層はレンズ状の堆積、下層は底面付近に分布する。③上層は、第2類、第9類、下層は第2類、第5類である。④第36号土壤出土土器と接合する。

〔土器分類〕 3は、C→J手法の第2類。1、4、7、8は、J→C→研磨手法の第5類である。1、4は、(R→Ct)、(R→C)を有する。一応本類とした。2はJ→C手法で口縁部に無文部を持つ。5、6は、内削ぎの口縁部断面を有する。横走沈線によって狹少な口縁部無文帶を区画し、以下に2本1組の沈線文を配する。

第12号土壤（第74図、第98図）

〔分布状況〕 ①出土量は少ないが、ほぼ中央部に分布する。②垂直分布は、同一レベルである。

〔土器分類〕 1は貫通孔を有する小突起部である。2、3はC手法の第9類である。4は無文である。

第13号土壤（第74図、第98図）

〔分布状況〕 ①土壤中央部に分布する。②垂直分布は、ほぼ中央部に「団子」状にまとまる。

〔土器分類〕 1～3は、C手法。2は細い工具による沈線である。4、5は無文。6は、薄手であり、C→JⅡ型と思われる新しい時期のものである。

第14号土壤（第75図）

遺物は少ない。1は、口縁無文部。2はC→J手法の第2類。3は波状口縁頂部に貫通孔を有し、両端に盲孔を配する「C」字状文で縁どられ、端部に盲孔を配し2本沈線によるI・文様帶が見られる。4、5はC手法。4は深鉢Bであり、屈曲部に刺突列が配される。

第16号土壤（第75図、第98図）

〔分布状況〕 ①北西側に散漫と分布する。②垂直分布も同一レベルである。

〔土器分類〕 1、2、4は第5類。1は、口縁直下に(R→Ct)を配し、以下に無文部を有する。2は、盲孔と稍円状沈線でI・文様帶が配される。

第17号土壤（第75図、第98図）

〔分布状況〕 ①分布は、北半と南半に2分される。②垂直分布は、同一レベルである。

〔土器分類〕 1は帰属不明。2は、C→Ct手法の第3類である。

第18号土壤（第75図）

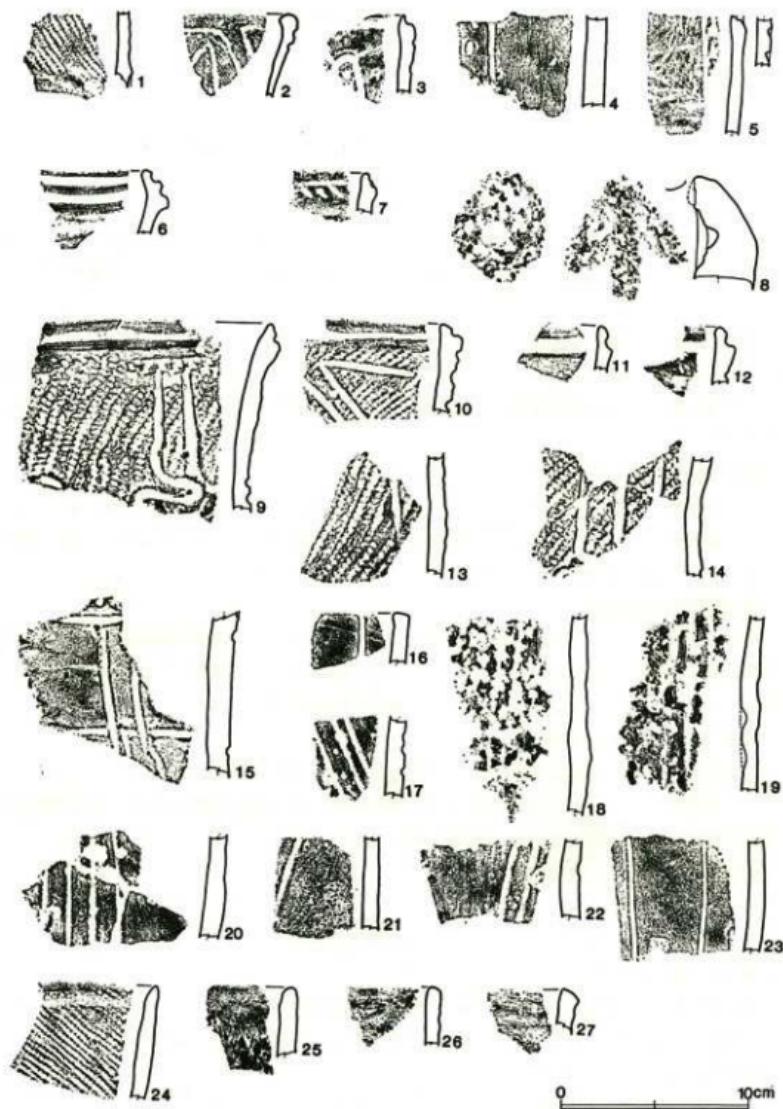
1、2は第2類。2は、口縁部無文部を有し、断面が内側に肥厚する。3は第5類。6は、口縁下に沈線を一条配する第6類である。4、5は第9類でくし状工具により密接施文される。

第19号土壤（第75図、第98図）

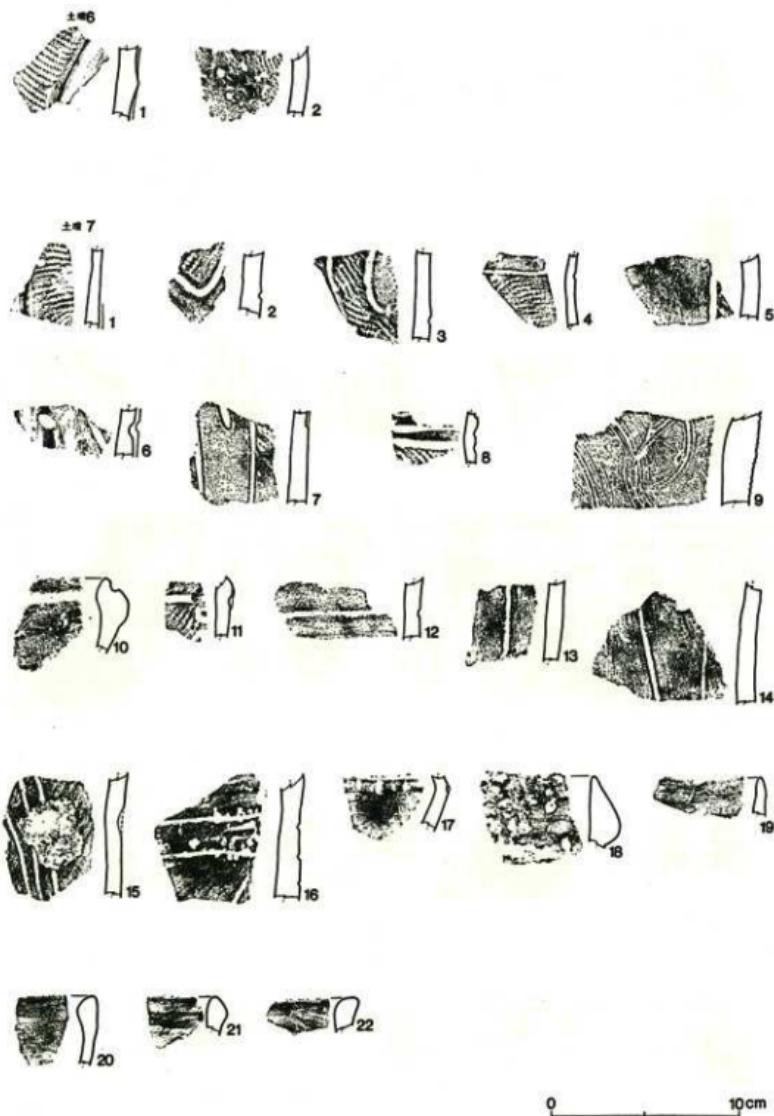
〔分布状況〕 ①中央～南側に分布する。②垂直分布は同一レベルである。

〔土器分類〕 1はC手法の第9類である。

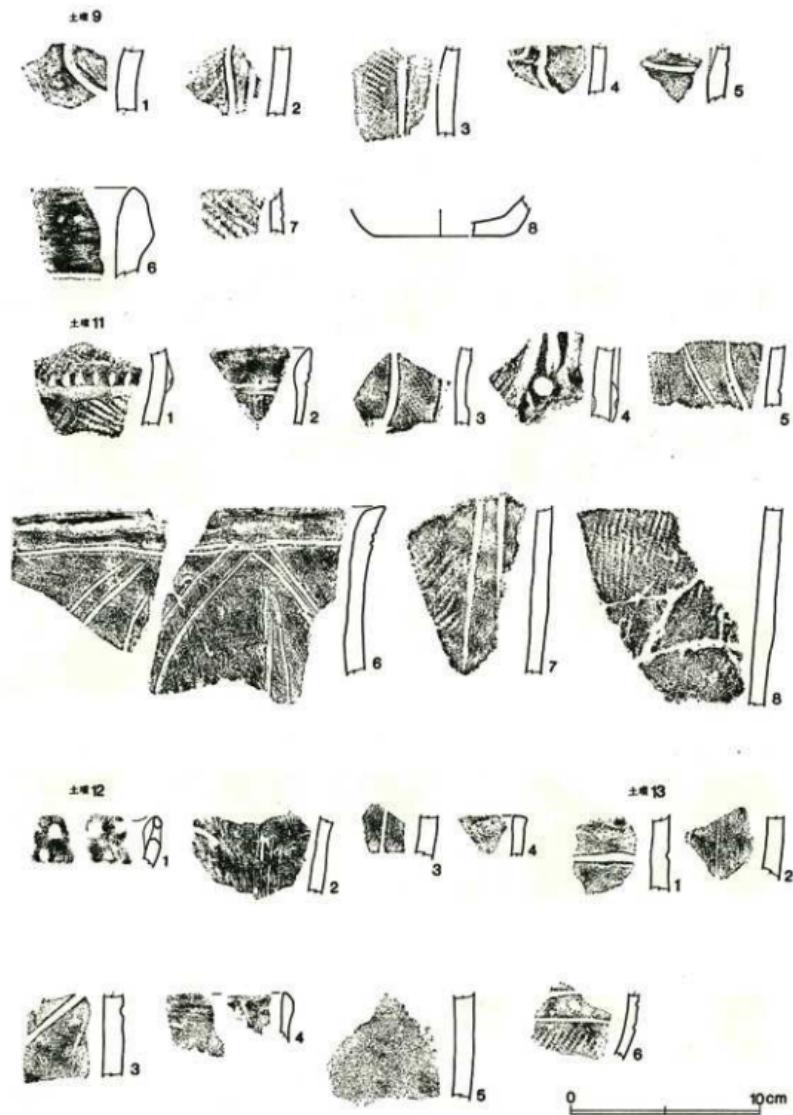
第20号土壤（第76図、第99図）



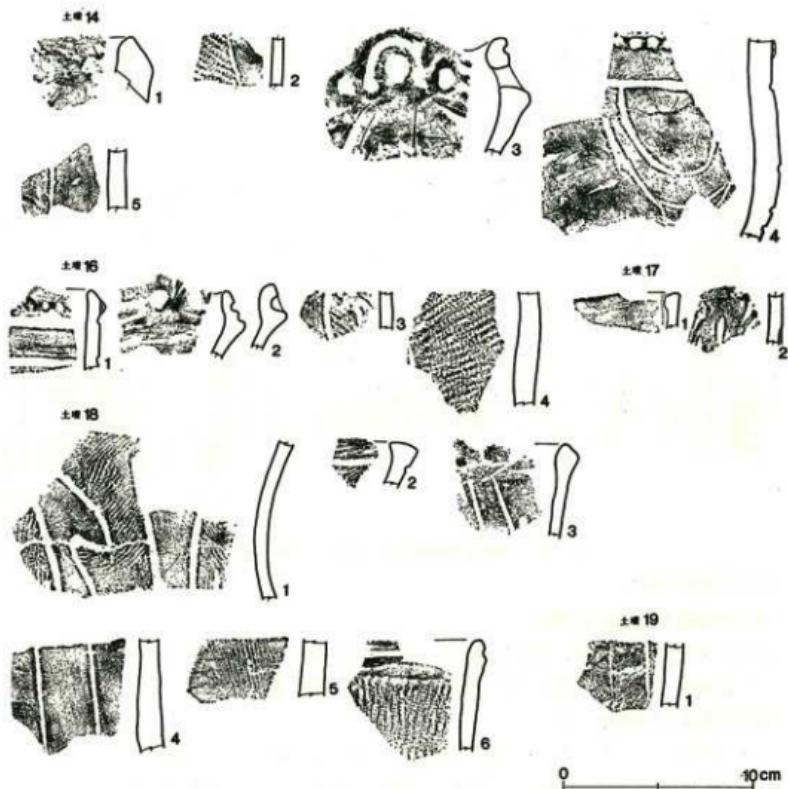
第72圖 土壤出土土器拓影圖（2） 第5號土壤



第73図 土壤出土土器拓影図(3) 第6号・7号土壤



第74図 土壤出土土器拓影図(4) 第9号、第11号~13号土壤



第75図 土壌出土土器拓影図（5） 第14号、第16号～19号土壤

〔分布状況〕 ①中央から南東部に主に分布する。②垂直分布はレンズ状の堆積である。

〔土器分類〕 1はC→J手法の第2類。2～4はC→Ct手法の第3類である。5は、J→C手法の第6類であり、くし状工具による細沈線を配する。

第21号土壤 (第76図、第99図)

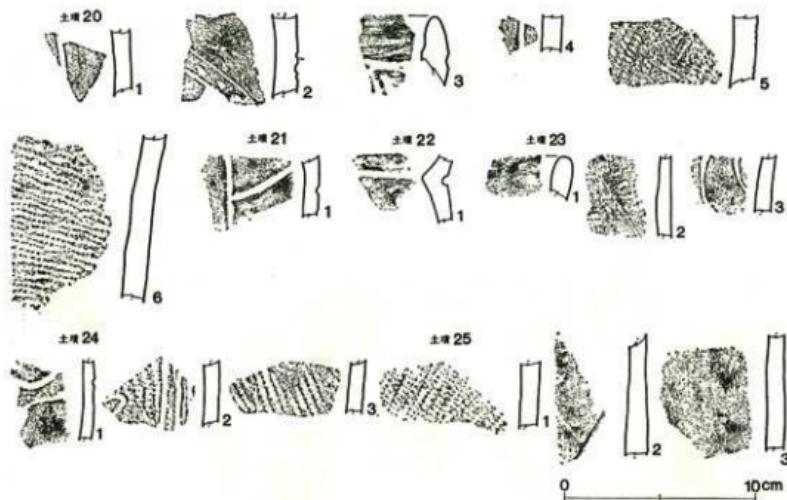
〔分布状況〕 ①中央部に分布する。②垂直分布は、レンズ状である。

〔土器分類〕 1は、C手法の第9類である。

第22・23号土壤 (第76図、第99図)

〔分布状況〕 ①第22号住は中央部に、第23号土壤は南側に分布する。②第22号土壤は、「団子」状の垂直分布、第23号土壤は、レンズ状の垂直分布である。

〔土器分類〕 第22土壤 1は、C手法第9類と思われる。第23号土壤 3はC手法第9類、1、2



第76図 土壤出土土器拓影図(6) 第20号～25号土壤

は無文の土器である。

第24号土壤 (第76図、第99図)

〔分布状況〕 ①中央部、東側に分布する。②垂直分布は、フラットである。

〔土器分類〕 1、2はJ→C手法の第6類。3はJ手法の第8類である。

第25号土壤 (第76図、第99図)

〔分布状況〕 ①ほぼ中央に分布する。②垂直分布は、ほぼ同じレベルである。

〔土器分類〕 1は、第7類、2はC手法の第9類である。3は、第8類である。

第26号土壤 (第77図、第99図、第2表)

〔分布状況〕 ①分布は、中央部に集中する。②垂直分布はレンズ状に分布する上層と中層、下層の3つのグループに分離する。各時期が混在し時期差は認められない。

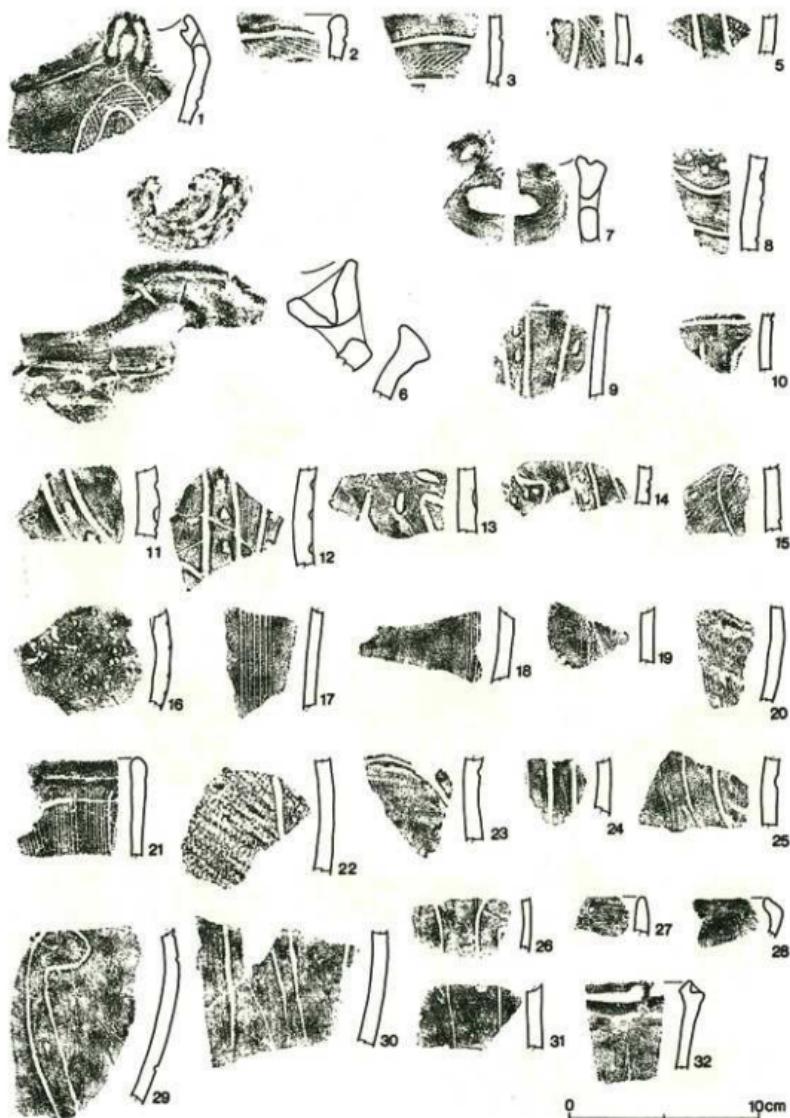
〔構成状況〕 ①大きさは0～9cmがピークで暫時減少する。②重量は、20g×20g、30g×30gが多く暫時減少する。③カーボンの付着する土器は40片認められた。④時期は、3期、4期が多い。⑤手法は9が多く、3、2が続く。5、6は少ない。

〔土器分類〕

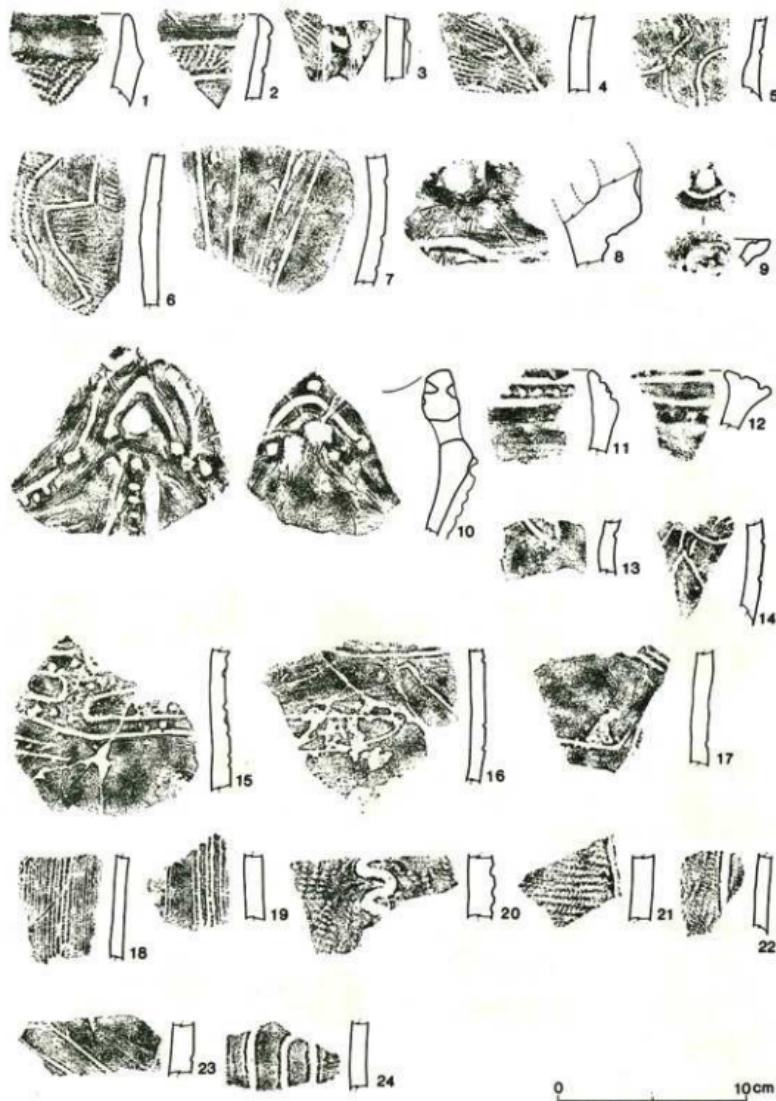
第2類(1～5) C→J手法の第2類。1は波状口縁で頂部に貫通孔を有する。貫通孔の両側に「C」字状の沈線文がある。C→J部は細く無文部がかなり多い。

第3類(6～15) C→Ct手法の第3類。6、7は口縁部で本類のものと思われる。1は貫通孔を有する大型の把手を有する。8～15は胴部で単列刺突が加えられる。

第4類(16) Ct手法で区画されない刺突が配される。刺突は直角に近い角度である。



第77图 土壤出土土器拓影图（7） 第26号土壤



第78图 土壤出土土器拓影图 (8) 第27号土壤 (1)

第6類(22) J→C手法。繩紋を地文として1本描き沈線文を配する。

第9類(17~21、23~26、29~31、32) C手法。17~21はくし状工具による密接施文、間隔をあけた施文である。23~26、29~31は1本描き沈線による。27、28は、口縁部無文部。32は盲孔、沈線によるI・文様帶を有する。

第27号土壤(第78、79図、第99図、第105図2、第2表)

〔分布状況〕 ①中央部~北西にかけて分布するが中心は中央部である。②垂直分布はN-S方向で、上層と下層に分かれ。上層は、さらに上下に分離される。上層はレンズ状の分布、下層は底面近くにはほぼフラットに分布する。

〔構成状況〕 ①大きさは、20cm×20cmがピークで30cm×30cm、20cm×30cmが続く。30cm×40cm、40cm×40cmの比率が高いのが特色である。②重量は0~9gがピークで暫時減少する。③カーボンの付着する土器片は64片確認された。④時期は4期がピークで3期に続く。⑤手法は、9が多く6は少ない。

〔土器分類〕

第1類(1) R→J手法。口縁部に無文帶を配し、回転方向を変えた繩紋を配する。

第2類(2~6、7) C→J手法。2は口縁部無文帶を有する。3は、縦位に(R→Ct)が配される。

第3類(7、15) C→Ct手法。区画内に単列刺突が配される。8は大型の把手を有する。

第6類(20~22) J→C手法。20は1本描き沈線による縦位蛇行文を配する。

第9類(11~14、16~19、23~25、第105図) C手法。18、19はくし状工具による密接施文。他は1本描き沈線による。25は、口縁下に幅広い無文部を持ち沈線による横区画を行う。第105図2は口縁部に、R→Ctを1段配し、I・文様帶とし、2本1組の「U」字状の沈線を一条廻らした後に沈線文を配する。26~30は口縁部無文部、27は口縁内側に隆帯を一条廻らす。9~12は、第3期と思われる口縁部片。胸部文様が不明なため一括する。10は波状口縁で貫通孔を有する。貫通孔を中心として、盲孔と沈線による縁どりがある。11は2本沈線間にCtが、12は梢円形状の沈線文を配しI・文様帶とする。

第28号土壤(第79図、第99図)

〔分布状況〕 ①中央~東側に分布する。②垂直分布は、上、下に分離し、大部分が上層である。

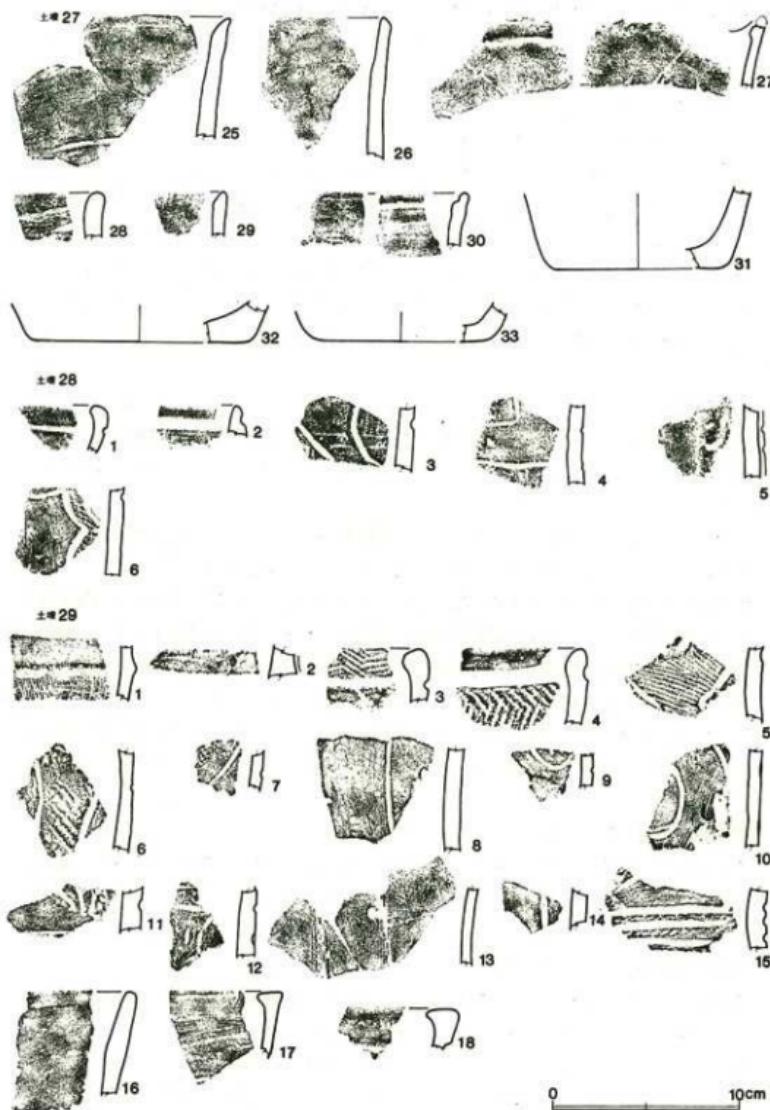
〔土器分類〕 1、3~6はC→J手法の第2類である。5は縦位の(R→Ct)を有する。2は第4類の口縁部である。

第29号土壤(第79図、第99図、第2表)

〔分布状況〕 ①下層が中央に、上層が全体に分布する。②垂直分布は、上、下に分離し、下位はさらに2分される。上面は水平に分布し、下位はレンズ状に分布する。

〔構成状況〕 ①大きさは20cm×20cmがピークで20cm×30cm、30cm×30cmが続く。②重量は0~9gがピークで暫時減少する。③カーボンが付着する土器片は27片確認された。④時期は4期、3期が多い。⑤手法は9が多く、10、3が続く。6は少ない。

〔土器分類〕



第79図 土壤出土土器拓影図 (9) 第27号 (2)、第28号、第29号土壤

第2類（3～7、17、18） C→J手法。3は口縁直下から繩紋を配する。4は無文部を若干配し、回転方向を変えた羽状繩紋を配する。5は細繩紋を充填する。

第3類（9～12） C→J手法。10はくし状工具による短沈線状の刺突。他は単列刺突である。1、2はR→C手法第9類で、口縁無文部を隆帯で区画する。13、14はC手法の第9類。13はくし状工具による縦位沈線が配される。15はJ→C手法の第6類。

第30号土壙（第80図、第100図、第3表）

〔分類状況〕 ①中央部から東側に分散して分布する。②垂直分布は上、下2層に分布する。大半は上層出土である。

〔構成状況〕 ①大きさは20cm×20cmがピークで、30cm×30cm、20cm×30cmが続く。40cm×40cmが比較的多い。②重量は0～9gをピークとし、暫時減少するが、30g～50gでもたつく。③カーボンの付着する土器は42片でかなり高い割合である。④時期は、4期が多く暫時減少する。⑤手法は、9が多く、2、1、5が続く。6は少ない。

〔土器分類〕 1、2はR→J手法の第1類。3、4は、3期又は4期の口縁部で盲孔と沈線による「」・文様帶が配される。7は、J→C→研磨手法の第5類。6、8、9はC系の第9類。1本描き沈線による。

第31号土壙（第80図、第100図）

〔分布状況〕 ①中央部～東側に分布する。②垂直分布は、上下2つに分布する。

〔土器分類〕 1は口縁部で内側に段を有し、盲孔を配する。2は、C手法第9類。

第33号土壙（第80図、第100図）

〔分布状況〕 ①中央部に少なく、壁下に分布する。②垂直分布は、1層でレンズ状に分布する。

〔土器分類〕 1はR→J手法の第1類。2は断面形状より第2類か。C手法である。

第35号土壙（第80図、第100図）

〔分布状況〕 ①土壤中央部に分布する。②垂直分布は、上下2層に分離すると思われるが判然としない。

〔土器分類〕 1～4、6は同一個体。波状口縁頂部に貫通孔を有する。把手内側には、盲孔と沈線によって、「C」字状文、同心円文が描かれる。口縁部は「く」字状に内彎し、端部に盲孔を配する沈線文を「」・文様帶とする。胴部は沈線区画内にくし状工具による刺突文を配する。第3類である。5はC手法、深鉢Bの屈曲部。7は、C→Ct手法。8はJ→C手法の第6類。9は安行系の粗製土器である。

第36号土壙（第81図、第100図、第105図3）

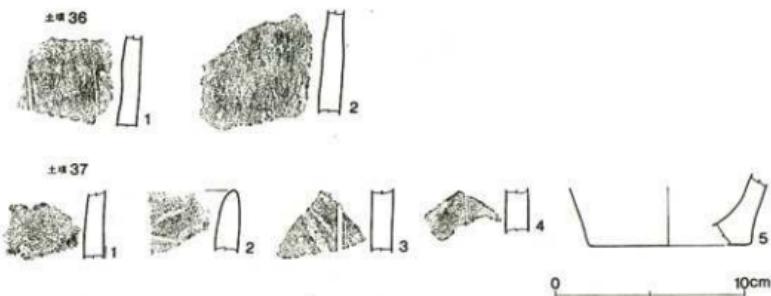
〔分布状況〕 ①出土数が少なく散漫に分布する。②第11号土壙と接合する。③垂直分布はほぼ同一分布である。

〔土器分類〕 1はC系で第9類。第105図3は胴部で「く」字状に屈曲する深鉢Bである。3単位の貫通孔を有する小突起をもつ。頭部に無文部を有し、屈曲部に2本沈線による区画がある。第4期と思われる。

第37号土壙（第81図、第100図）



第80圖 土堆出土土器拓影圖（10） 第30号～35号土壤



第81図 土壌出土土器拓影図(11) 第36号、37号土壤

〔分布状況〕 ①中央部付近に分布する。②垂直分布は上下2層に分離する。

〔土器分類〕 1はR→J手法の第1類。3、4はC手法の第9類。1本描き沈線による。

第38号土壤 (第82図、第83図、第105図4、第3表)

〔分布状況〕 ①分布密度が高く、全面に分布するが、壁下には少ない。②垂直分布は、焼土層の状況と同様にレンズ状の堆積である。

〔構成状況〕 ①大きさは20cm×20cmがピークで30cm×30cm、20cm×30cmが続く。②重量は0～9gがピークで暫時減少する。③カーボンの付着する土器片は100片出土している。④時期は第3期が多く、第4期が続く。⑤手法は9が多く、3が続く。

〔土器分類〕

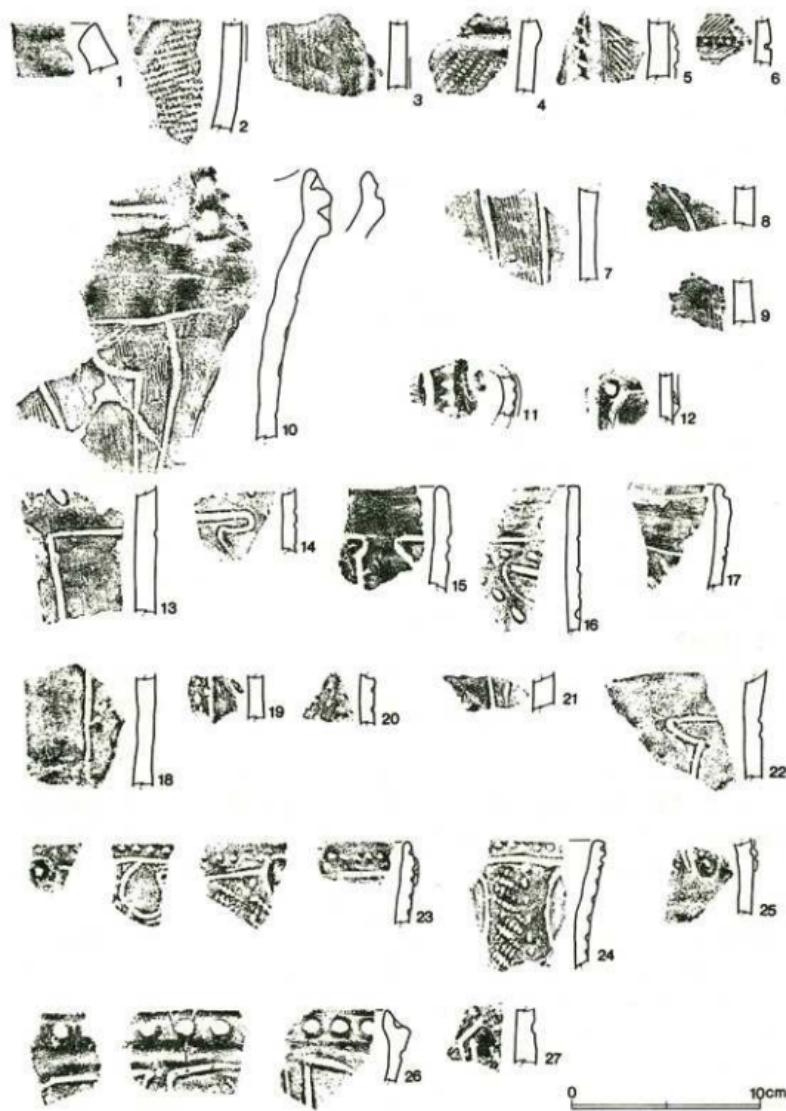
第1類 (1～4) R→J手法。1は口縁部に無文帶を持つ。4は「カマボコ」状の隆起である。

第2類 (5、6) C→J手法。5は縦位の (R→Ct) を有する。6は、沈線内に刺突が加えられる。

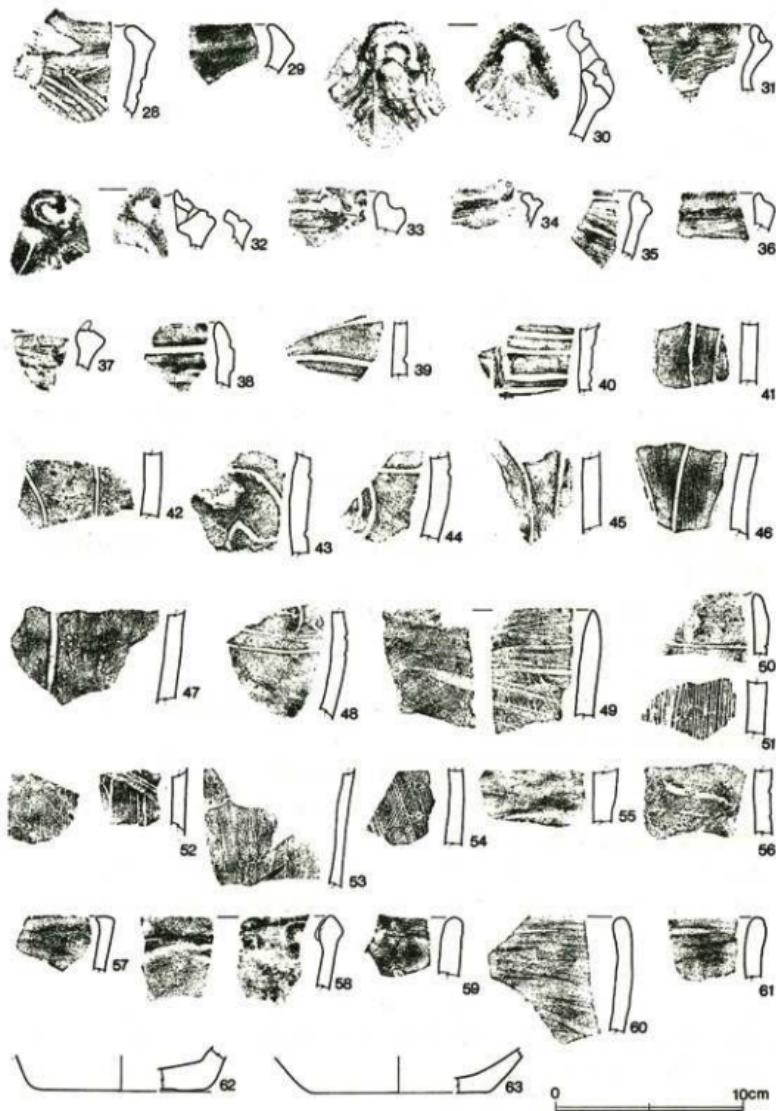
第3類 (10～22) C→Ct手法。7～10はくし状工具による短沈線状の刺突である。10は盲孔による「8」字状文を中心に端部に盲孔を配した沈線によってI・文様帯を形成する。I・文様帯は横走沈線によって区画され、以下に「V」字状の文様を配するものと思われる。13～22は先端の丸い工具による刺突文。15は無文部が貫入する。17は、沈線によるI・文様帯を有する。19、20は複列の刺突。

第5類 (23～27) J→C→研磨手法。23～25は同一個体。横位沈線によって口縁部無文帶を区画し、単列刺突を充填する。文様は磨消繩紋によって描かれ、繩紋部に縦位の単列刺突が加えられる。26は、口縁部がゆるく内彎する。口縁に大きめの単列刺突を配する。

第9類 (28、29、39～56) C手法。50～54はくし状工具による密接施文。50は口縁部無文帶を有する。他は1本描きによる。28は「く」字状に内彎する口縁部を有する。第105図4は深鉢Bで、屈曲部に区画沈線文を有す。口縁部が肥厚し、裏面に沈線を配す。1ヶ所に貫通孔を有する突起を持つ。突起は、盲孔、沈線で縁取られる。30～38は口縁部片。大略第3期に属すると思われるが類型は不明。30、31は波状口縁頂部に貫通孔、C字状文を有し、沈線によるI・文様帯を配する。33



第82図 土壤出土土器拓影図(12) 第38号土壤(1)



第83図 土壤出土土器拓影図(13) 第38号土壤(2)

～35は沈線によるI・文様帶を配する。

第39号土壌（第84図）

1、2はC→Ct手法の第3類。3は口縁部が肥厚し、大きめの単列刺突を配する。5～9はC手法。5は沈線によるI・文様帶を有する。

第40号土壌（第84図）

2は、くし状工具によるC手法で間隔をあける。4は口縁に単列刺突を配する。

第41号土壌（第85図、第101図、第104図2）

【分布状況】 ①中央部に分布する。②垂直分布は上下に2分する。上層はフラットな分布、下層は「団子」状の分布である。

【土器分類】 1～15は、位置記入。他は上面よりの一括取り上げである。

第1類（1、16） 第104図2は無文深鉢、口縁内側にわずかに内彎する。胴部でゆるくくびれ、器面に察痕状の調整痕がある。同一個体。無文時にRを配する。

第2類（2～17） C→J手法。2、4は内彎する口縁を有する。7は、繩紋部に刺突が加わる。

第9類（9～12、15、18、21～23、25） C手法。1は波状口縁で頂部内側に盲孔を有する。横位沈線で頸部無文部と区画し、以下に沈線文を配する。18は、波状口縁頂部に貫通孔を有し、沈線によるI・文様帶を配する。口縁部は肥厚する。8、13、19は把手及び口縁部。8、13は貫通孔、19は盲孔と沈線文によるI・文様帶が配される。20、25はC→Ct手法。25は小型深鉢である。

第43号土壌（第84図）

1、2はR→J手法の第1類。3、4はC→J手法の第2類である。

第44号土壌（第84図、第101図）

【分布状況】 ①土壌中央部に分布する。②垂直分布は上下に分離しそうであるが明瞭でない。

【土器分類】 1は、口縁部を無文とし（R→Ct）で区画、以下に刺突文を配する。

第45号土壌（第86図、第101図）

【分布状況】 ①全体的に散在する。②垂直分布は上下に分離する。

【土器分類】 1、2はC→J手法の第2類。4、5は間隔を開けた繩紋施文である。

第46号土壌（第86図、第101図、第3表）

【分布状況】 ①ブロック状に固まって数ヶ所に分布する。②垂直分布はほぼ同一レベルである。

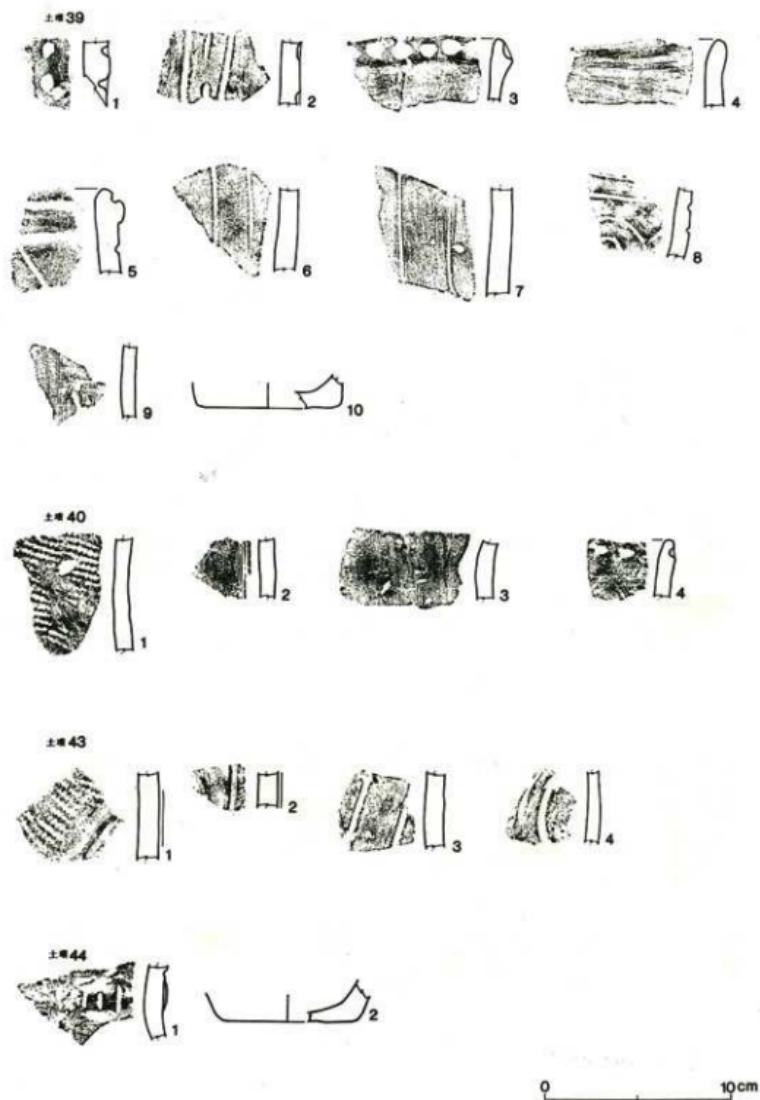
【構成状況】 ①大きさは20cm×20cmがピークで30cm×30cm、20cm×30cmと続く。②重量は0～9gをピークとして暫時減少する。③カーボンの付着する土器片は9片である。④時期は4期が多く暫時減少する。⑤手法は9が最も多い。

【土器分類】 1はR→J手法。2は狹少な無文部を（R→Ct）で区画する。3、4は同一個体。深鉢Bで口縁部にI・文様帶を有し、頸部を無文とする。屈曲部に沈線区画を有し、以下C→Ctの曲線文を配する。8～11は、覆土上層一括取り上げ。いずれもC→J手法。11はCtが加わる。

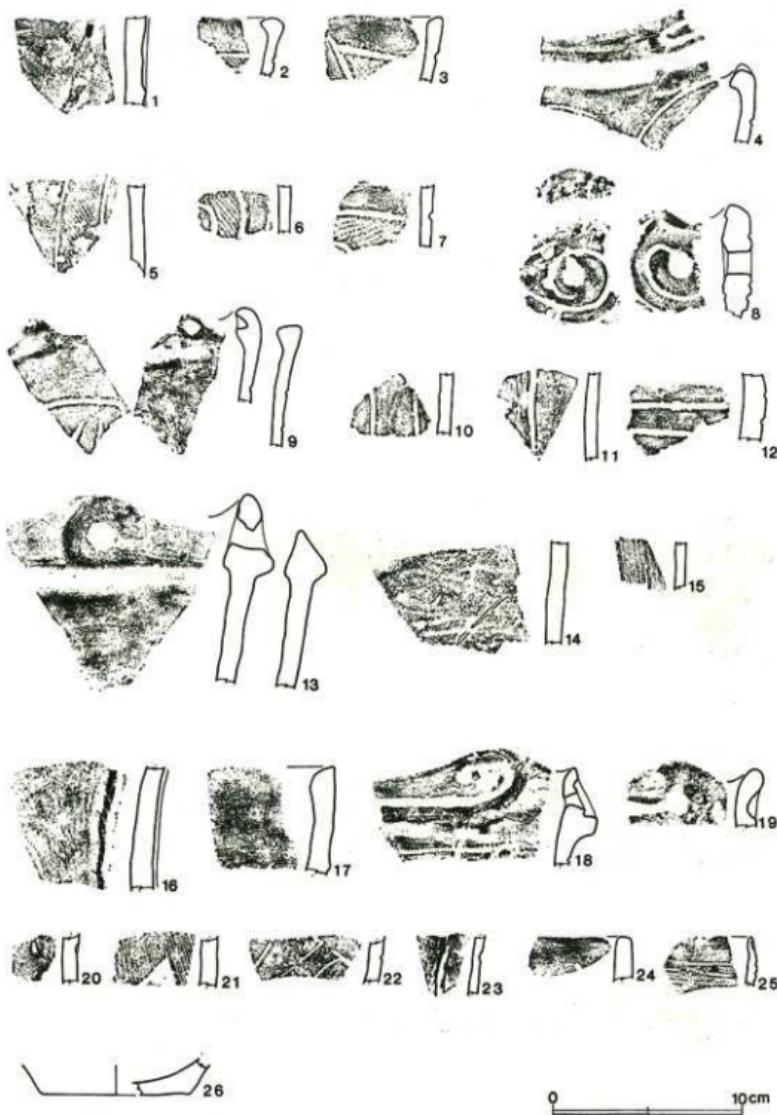
第47号土壌（第86図、第101図、第3表）

【分布状況】 ①西側に主に分布する。②垂直分布は上下に2分される。レンズ状の分布である。

【構成状況】 ①大きさは20cm×20cmがピークで30cm×30cm、20cm×30cmが続く。②重量は、10



第84图 土壤出土土器拓影图 (14) 第39号、40号、43号、45号土壤



第85圖 土壤出土土器拓影圖 (15) 第41號土壤

g ~ 19 g がピークである。③カーボンが付着する土器は 9 片である。④時期は 4 期、3 期が多く、2 期へ続く。⑤手法は、9 が多く、2 が続く。

〔土器分類〕 1 ~ 5 は C → J 手法の第 2 類、5 は口唇部に沈線を配する。6 は、貫通孔を有する把手。両端に盲孔を配する「C」字状文が加わる。9 は C 手法の第 9 類である。

第48号土壤 (第86図、第101図、第106図1)

〔分布状況〕 ①中央部付近に分布。②垂直分布は、上下 2 層に分離する。③大部分が一個体に接合する。

〔土器分類〕 第 106 図 1 は深鉢形。口縁部無文帶を有する。C 手法で描かれる。全体として横方向に展開する。かなりくずれているが、橢円形状のモチーフと「7」字様のモチーフを対立させている。1、2 はいずれも C 手法の 9 類である。

第50号土壤 (第87図、第101図)

〔分布状況〕 ①中央部に分布する。②垂直分布は略 2 層に分布する。

〔土器分類〕 1 ~ 3 は C → J 手法の第 2 類である。4 は C 手法の第 9 類である。

第52号土壤 (第87図、第101図)

〔分布状況〕 ①中央部に分布する。②出土数は少ないが、同一レベルの分布である。

〔土器分類〕 1 は C → J 手法の第 2 類である。

第53号土壤 (第87図、第102図、第106図2、第4表)

〔分布状況〕 ①土壤南側に分布が集中する。②垂直分布は 3 つのレベルに分布する。北半のフラットな分布、集中部分のレンズ状分布で、集中部分は上下に 2 分される。

〔構成状況〕 ①大きさは、20cm × 20cm をピークとして暫時減少するが、40cm × 50cm 前後が比較的多い。②重量は 0 ~ 9 g をピークとするが、30 g ~ 39 g で若干もたつく。100 g オーバーが多い。③カーボンの付着する土器は 39 片である。④時期は第 4 期が多い。⑤手法は、6 と 9 が大略同じである。

〔土器分類〕 8、10、19 は J → C → 研磨手法の第 5 類である。

第 6 類 (1 ~ 3、11 ~ 18) J → C 手法。1 ~ 3 は口縁部で沈線による I ・ 文様帶を有する。11 ~ 18 は脣部で多条の沈線文が配される。繩紋はいずれも L R の横回転である。

第 9 類 (4 ~ 6、9) C 手法。9 は細沈線により格子状に描く。4 ~ 6 は、沈線による I ・ 文様帶を有する。5、6 は脣部文様が不明であるが一応本類としておく。

第 106 図 2 は口径 31.5 cm 前後の無文浅鉢土器である。口縁部が若干内彎する。

第54号土壤 (第88図、第89図、第102図、第106図3、第4表)

〔分布状況〕 ①中央から南側に分布する。②垂直分布は、レンズ状の堆積で分離は不明瞭。

〔構成状況〕 ①大きさは 30cm × 30cm がピークで 20cm × 20cm が続く。②重量は 10 g ~ 19 g がピークで 0 ~ 9 g と続き暫時減少する。③カーボンの付着する土器は 41 片である。④時期は 1 期、2 期が多い。⑤手法は、1、2 が多い。

〔土器分類〕

第 1 類 (1 ~ 14、第 106 図 3) R → J 手法。3、4 は無文地に微隆起線を配する小型壺。7、



第86図 土壤出土土器拓影図(16) 第44号~48号土壤

13、14は、波状口縁頂部で、円形の「8」字状の隆帶文が付き、貫通孔を有する。11は口縁下に横走刺突列を配するものと思われる。12は、口縁部無文帶を微隆線で区画し、縦回転の繩紋を配する。

第106図3は深鉢底部である。断面三角形の微隆起線で4単位の文様が配される。梢円文の下限で底部に向って開放される。

第2類(15~32) C→J手法。15、16は細い沈線により梢円形状のモチーフが配されるものと思われる。加曾利EⅣ式沈線文系列である。17~21は口縁部片。口縁部に無文帶、以下に横走の繩紋帶が配される。22~32は太めの沈線内に細繩紋を配する。33、38はC手法の第9類。39~42は繩紋が配れるがいずれも縦回転のLRである。

第56号土壙(第89図、第102図、第4表)

〔分布状況〕 ①土壙中央部に分布する。②垂直分布は上下に分離され、上層はレンズ状の分布、下層は底面近くにフラットに分布する。

〔構成状況〕 ①大きさは20cm×20cmが多く、10cm×10cm以下が続く。②重量は0~9gが多く暫時減少する。③カーボンが付着する土器は7片である。④時期は2期がほとんど。⑤手法も2が多い。

〔土器分類〕 1~7までC→J手法の第2類である。1は口縁直下に繩紋帶を配し、さらに2列の刺突列が加えられる。4は、縦位分割の(R→Ct)が垂下する。

第58号土壙(第89図、第102図、第4表)

〔分布状況〕 ①土壙中央部に分布する。②垂直分布は、上下に分離され、レンズ状の分布。

〔構成状況〕 ①大きさは20cm×20cm、30cm×30cmが多い。②重量は0~9gが多く暫時減少する。③カーボンの付着する土器は15片である。④時期は2期が多い。⑤手法は、2が多く、1が続く。

〔土器分類〕 1、2はR→J手法の第1類。口縁はかなりきつく内巻する。波状口縁頂部に盲孔を配し、直下に隆帶、及び沈線による同心円状の文様が描かれる。口縁部に狭少な無文部を置き、2本沈線間に2列刺突文を配するI・文様帶が横走する。2は頸部片である。3~8はC→J手法の第2類である。

第59号土壙(第90図~第93図、第107図、第108図)

本土壙では、仔細なデータを取っていない。取り上げ時の状況は、略、第26号土壙と共通する。

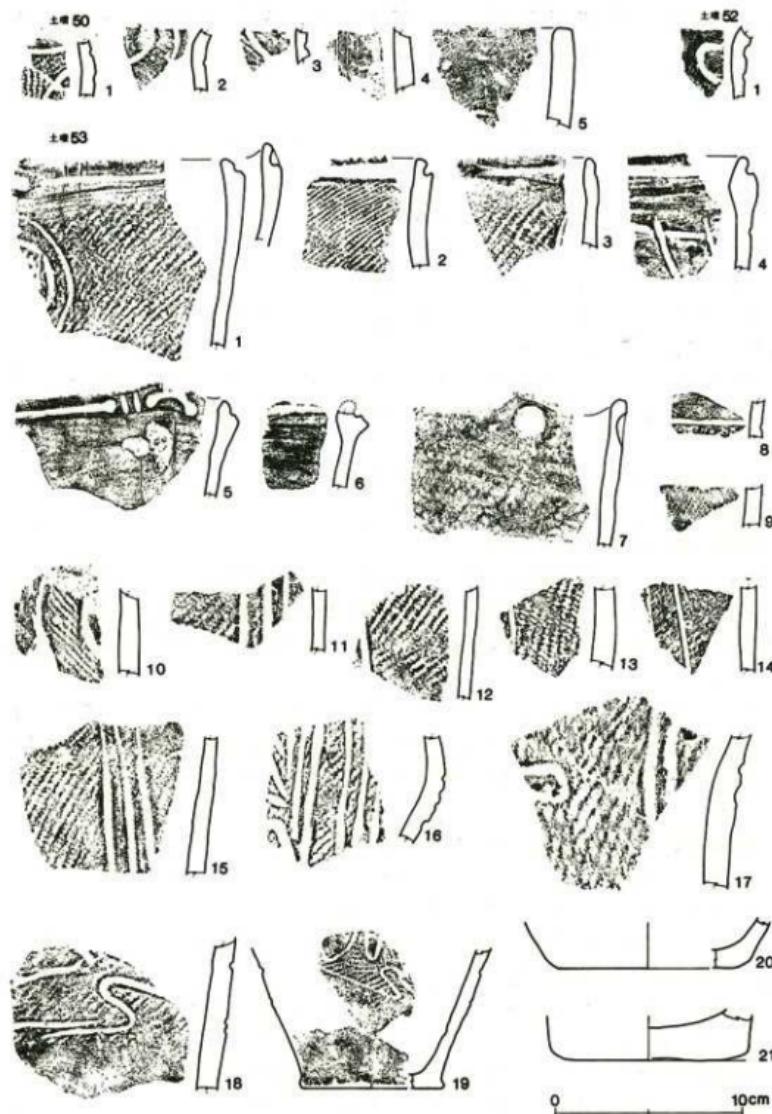
第1類(1~3) R→J手法。1は口縁部に無文部を有する。

第2類(4~10) C→J手法。4、5は口縁部で無文部を有する。9は区画沈線が充填繩紋によってつぶされている。10は縦区画(R→Ct)が垂下する。

第3類(13~21) C→Ct手法。13~17は押し引き状の単列刺突を配する。18~20は直角に近い刺突で19は複列刺突である。21はくし状工具による短沈線を充填する。

第5類(36~45) J→C→研磨手法。狭少な2本沈線間を磨消す。36、37は沈線によるI・文様帶を有し、37は頸部に無文部を置く。38は、波状口縁頂部に貫通孔、口縁部に無文部を有し、頂部下に同心円状のモチーフを配する。

第6類(46~57) J→C手法。46、47は沈線文によるI・文様帶を有す。48は、大きめの刺突



第87図 土壤出土土器拓影図(17) 第50号～53号土壤

列を配する。胸部は繩紋を地文として、多条沈線が配される。

第9類(27、33~35、59~82) C手法。59~63は沈線によるI・文様帶を配し、頸部無文部を有する。胸部文様が不明であるが一応本類とした。65は、口縁部が「く」字状に外反する。66は内側に沈線文を配する浅鉢である。22~32は、3期~4期の口縁部、把手部である。22、23は貫通孔を有し、「C」字状の沈線が加わる。58はC→J型である。

第107図1は第9類深鉢である。4単位波状口縁で頂部下の縦位沈線と横走沈線によってI・文様帶を形成する。胸部文様は「U」字状文を上下に対峙させる。

第107図2は、J→C手法の第6類深鉢である。口縁が内彎しボール状を呈する。口縁直下の2本沈線と胸部最大径付近の弧状沈線で狭少な文様帶を区画し、渦文及び斜行沈線文が配される。

第107図3はJ→C手法の第6類深鉢である。口縁部が直立する3単位の波状口縁を有し、大きめの盲孔と沈線によりI・文様帶を形成する。胸部は2本沈線による長い同心円状のモチーフを有し、中央と単列刺突文が配される。

第108図1は浅鉢で口縁裏面に盲孔と沈線による4単位の文様を有する。各単位の盲孔の配置はそれぞれ異なっている。

第108図2は繩文だけの施文される深鉢で波状口縁を有する。

第60号土壙(第94図~第97図)

1はR→J手法の第1類。2~25はC→J手法の第2類。5~10は口縁部無文部を有する。26~37はC→Ct手法の第3類。26、36は複列刺突、他は単列刺突である。38~49、53は第3期と想定される口縁部、頸部片。38は貫通孔と「C」字状の沈線文を有する。39は頂部に盲孔、「C」字状文を有する。41、42、44、48、52は、口縁部に沈線+刺突文によってI・文様帶を配する。49は梢円状沈線と盲孔によってI・文様帶を有する。50、51、54~64は沈線文と刺突文によるI・文様帶を有するもの。第4期の口縁部と思われる。

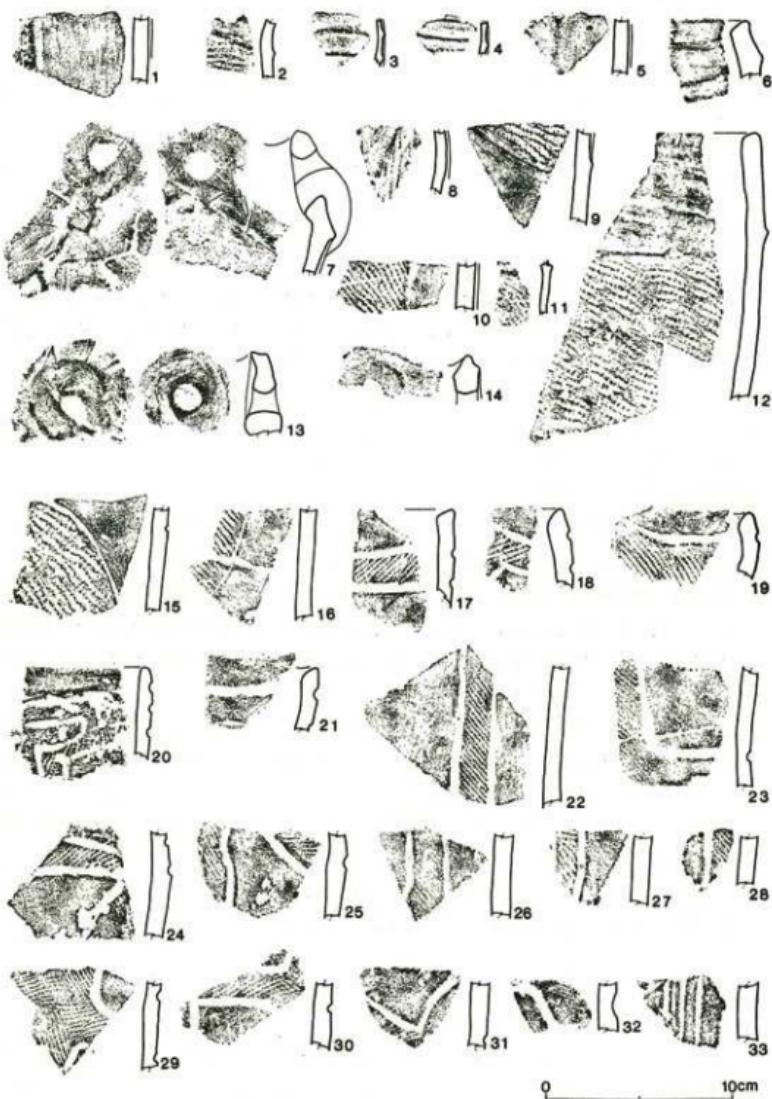
第5類(71~73、79、80~83、85、87) J→C→研磨手法。71は、口縁に無文部を有し、斜行回転の繩紋を磨消する。72は、梢円形状のモチーフをI・文様帶とする。80~83は多条沈線間の磨消である。

第6類(74~78、84、86、88~106) J→C手法。74は盲孔と2本沈線によりI・文様帶を配する。75~77は沈線によるI・文様帶を配する。

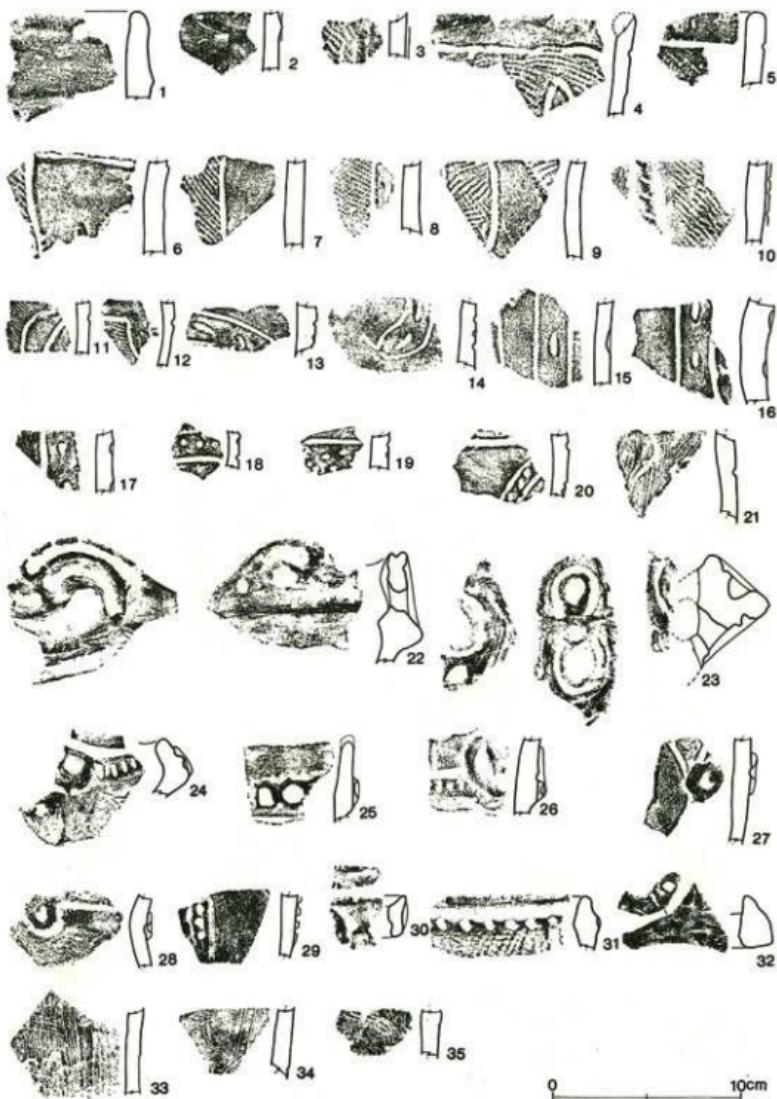
第9類(68~70、110、134) C手法。110は沈線によるI・文様帶。111~113は口縁無文部を有する。130~134は多条化した沈線によって渦文が描かれる。

2-3 グリット出土土器

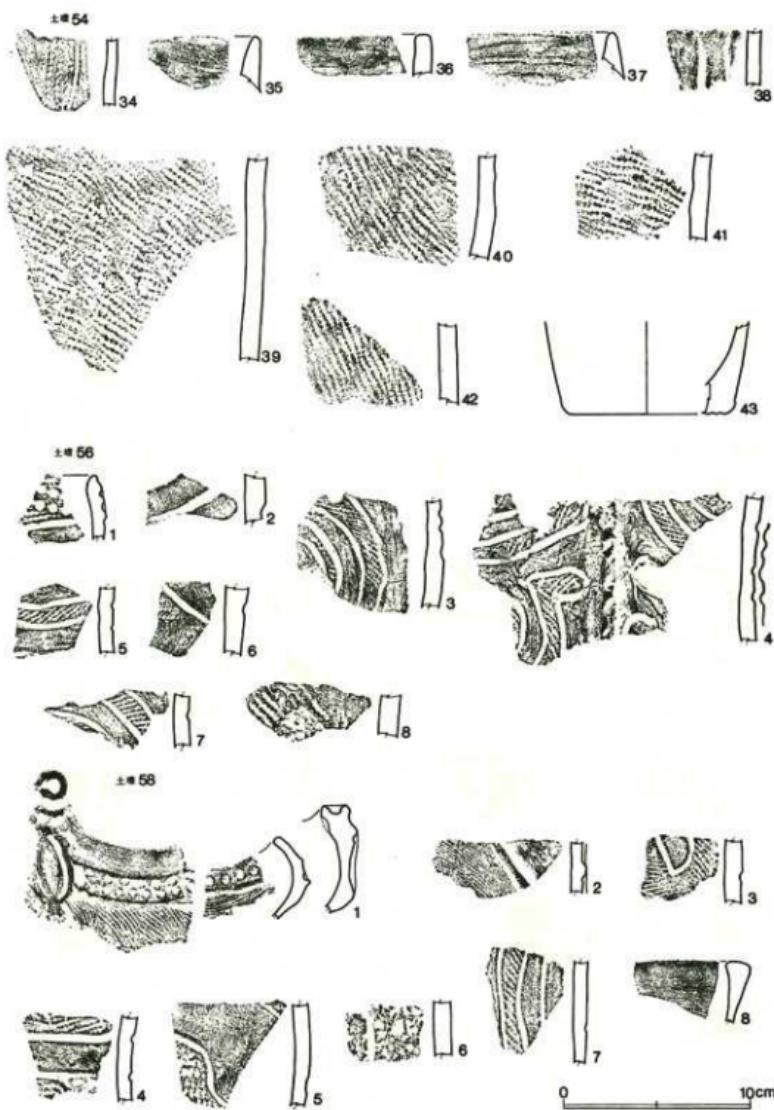
久台遺跡では、I区で薄いながら繩文時代後期初頭の遺物包含層が確認できたが、II区、III区では近世期の搅乱によって遺構まで削平される状況であった。従って、近世期の遺構内に多くの繩文土器片が混入する結果となった。これらは、実測可能なもののみグリット出土土器と同一に扱う。最初にI区包含層を、次に表土層の順で図示し、記述は統一して行う。尚、分類に当たっては細片が



第88图 土壤出土土器拓影图 (18) 第54号土壤 (1)



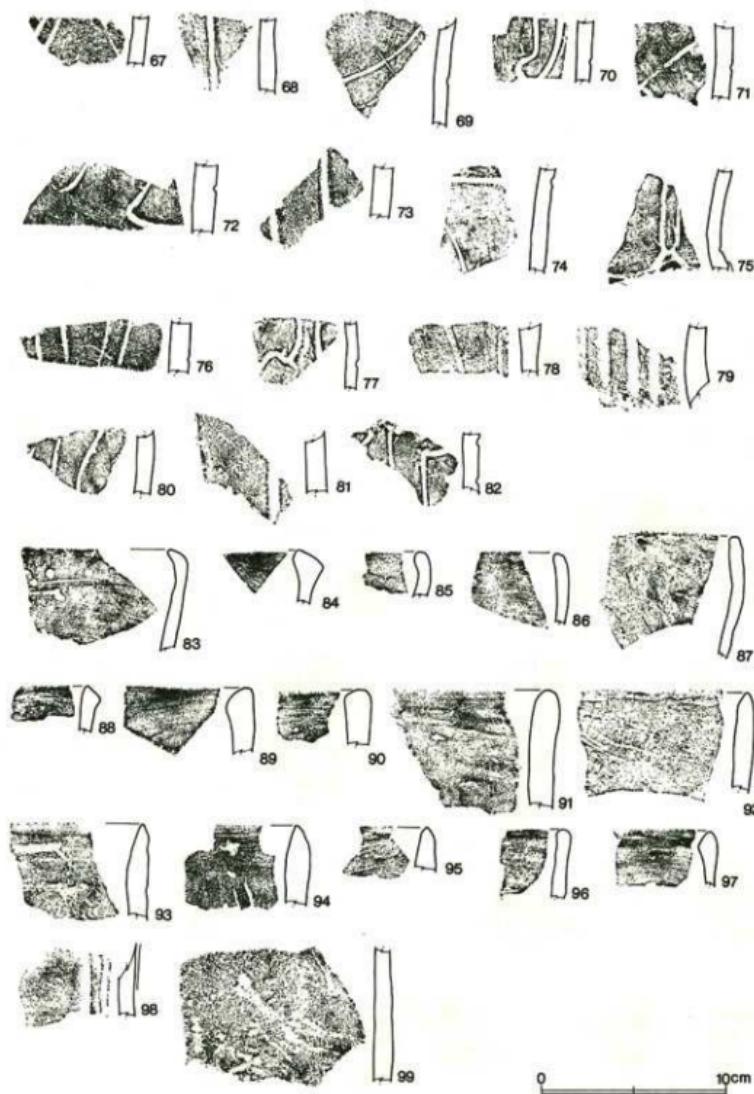
第89图 土壤出土土器拓影图 (19) 第54号 (2) ~58号土壤



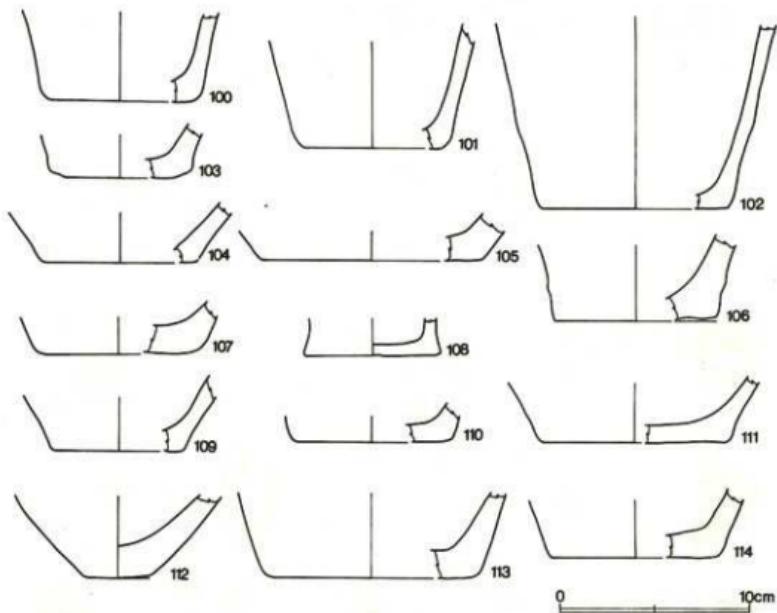
第90図 土壤出土土器拓影図(20) 第59号土壤(1)



第91図 土壤出土土器拓影図(21) 第59号土壤(2)



第92図 土壤出土土器拓影図(22) 第59号土壤(3)



第93図 土壤出土土器拓影図(23) 第59号土壤(4)

多いため、器形、文様モチーフ等についてまでは言及できない。

第1類(第109図1~18、第115図) R→J手法。主に口縁部状況より4種に分ける。

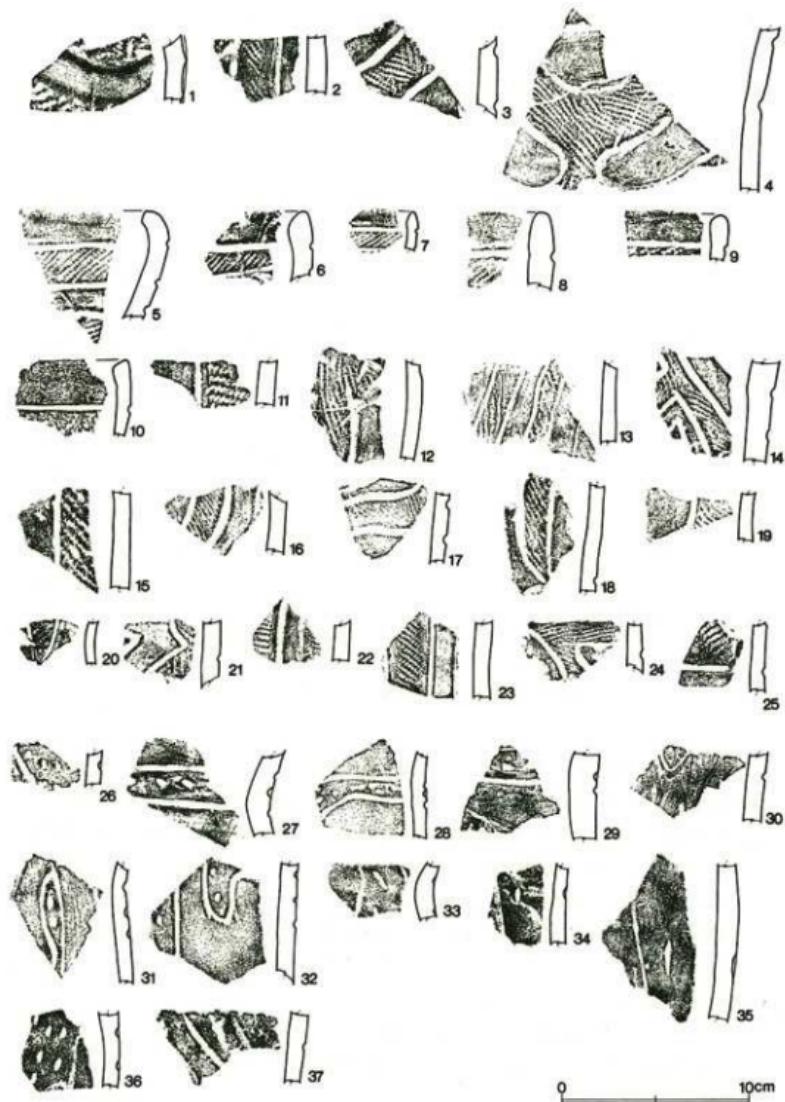
A(第109図1~4、6~10、第115図1~6) 微隆起線で区画された口縁無文部を有するもの。口縁端部断面が比較的丸く第2類土器との共通性がうかがえる。口縁部がわずかに内彎するものと、直立気味のもの2種類が認められる。

B(第109図5、第115図11、12、15~17) 微隆起線で区画された口縁無文部を持つ点で共通するが区画隆起線の上下両端、又は一方にナゾリが入るもの。口縁部がかなり内彎する。胸部はC→J手法による文様が描かれる。第115図11は下からの隆起線が開口する。胸部はC→J手法。

C(第109図11、第115図22、23) 断面が内側に「く」字状に肥厚するもの。22、23は口縁無文部下に微隆起線で区画された横帶刺突列を有する。第54号土壤、第58号土壤出土のR→J系の土器と共通するものと思われる。

D(第115図18~20) 小型壺で無文地に微隆起線文を配する。第19号住居跡出土土器と共に通す。

第2類(第109図19~38、第116図) C→J手法。細片のため断定しがたい部分が多いが、口



第94図 土壤出土土器拓影図(24) 第60号土壤(1)

縁部形状、手法等により 3 種に分ける。

A (第 116 図 1、3) 狹少な無文部を口縁に有し、胴部には加曾利 E IV 系列の文様モチーフを描くものと推定される。第 54 号土壙、第 19 号住居跡からわずかに出土している。

B (第 109 図 19) 口縁部直下から繩紋帶を配するもの。概して区画沈線が太く力強く描かれる。充填される繩紋も細かいものが多く、焼成も比較的甘いものが多い。第 116 図 15~17 等である。

C (第 109 図 20、21、第 116 図 2、4~13) 口縁無文部を有するもの、無文部が文様中に貫入するもの (第 116 図 2、10) との別があるが現資料での分別は困難である。口縁が内彎するものと直立気味のものの 2 種ある。

第 3 類 (第 110 図 1~14、第 117 図 1~13、15~19) C→Ct 手法。口縁部~胴部にかけての資料が希薄であるため胴部中心の分類である。充填する刺突の手法によって 2 種に分け、それぞれが 2 分される。

A 1 (第 110 図 2~4、6~11、13、第 117 図 1~6、9~11) 先端の丸い棒状工具による押引き状の刺突を單列充填するもの。第 110 図 6 は口縁無文部を有し、(R→Ct) が加わっている。

A 2 (第 110 図 5、12、第 117 図 7、8、12、13、15) 施文具は A 1 と同様であるが複列の刺突を充填するもの。

B 1 (第 110 図 15、16) 充填刺突がくし状工具で行なわれるもの。15 はボタン状の貼り付け文下に「C」字状文を配する深鉢 B である。

B 2 (第 110 図 17~19、30) 施文具は B 1 と同様であるが、短沈線、沈線となるもの。30 は繩紋と複合する折衷型式である。

第 4 類 (第 110 図 14、第 117 図 15) Ct 手法。尖がり気味の口縁端部で口縁直下から刺突文を配する。角状の特徴的刺突である。

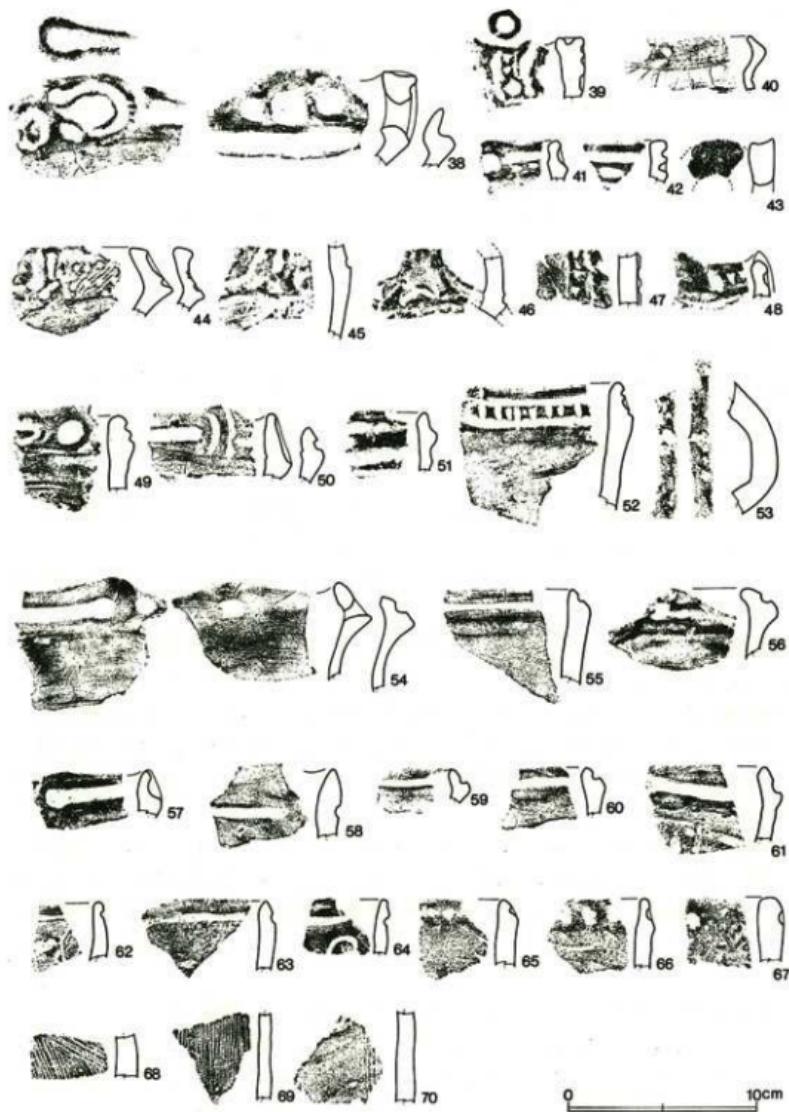
第 5 類 (第 111 図 16~23、第 112 図 1、第 117 図 27~29、第 123 図 4) J→C→研磨手法、及び第 2 類と異なる文様モチーフを有するもの。第 112 図 1 は「8」字状貼付け文を中心に (R→Ct) で口縁無文部を区画し、以下に藤手文、同心円文を配する。28、29 も (R→Ct) による横帯区画を有する。

第 6 類 (第 112 図 2~15、第 118 図) J→C 手法。器種は大略深鉢と胴部で屈曲する深鉢 B の 2 種類である。盲孔と 1 本沈線による I・文様帶を有するものが多い。第 118 図 2、3 は I・文様帶下に 1 本沈線による蛇行文を配する。6 は波状口縁深鉢 B で貫通孔を有する。表裏に盲孔と沈線による縁取りがある。胴部文様は全体に比較的太い沈線で描かれる事が多く、多条化するものは少ない。

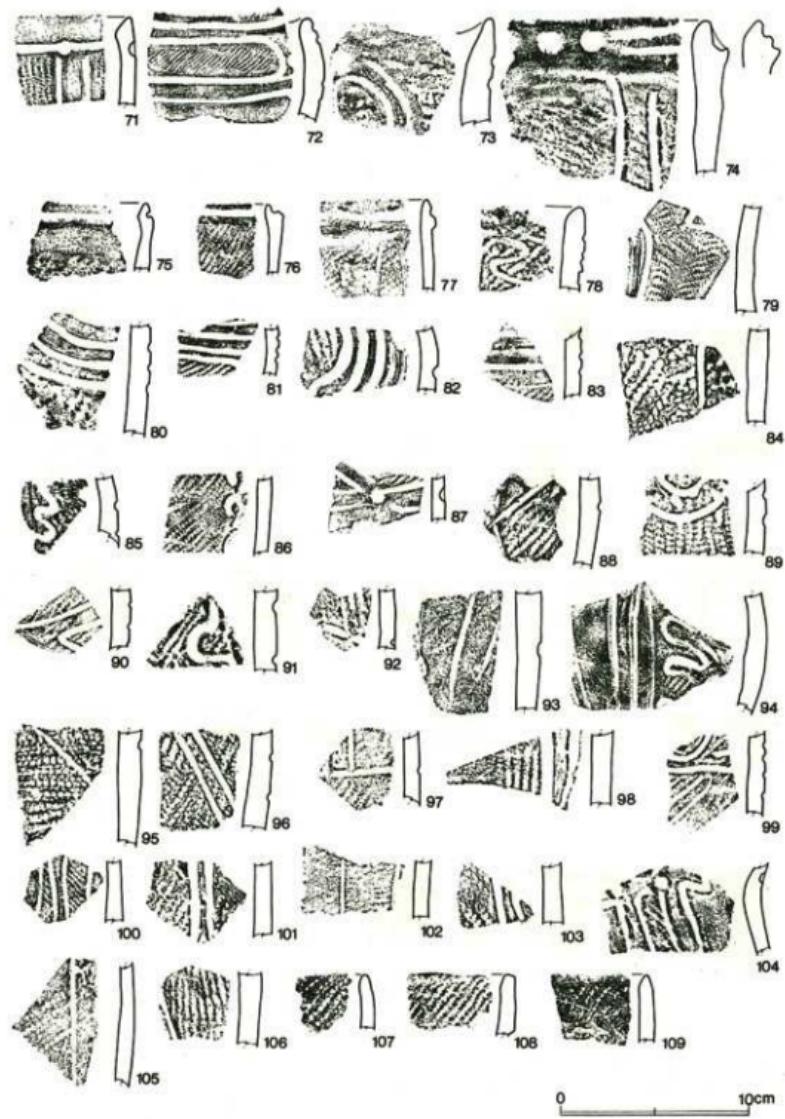
第 9 類 (第 110 図 20~29、31、第 113 図、第 114 図 1、2、第 117 図 16~19、第 119 図、第 120 図) C 手法を有するもの。器種は深鉢と深鉢 B が基本である。沈線の形状により 2 種に分ける。

A (第 110 図 20~29、31、第 117 図 16~19) 沈線文がくし状工具で描かれるもの。器種は深鉢が多い。口縁無文部を有するもの (第 110 図 20)、口縁直下から沈線文を配するものがある。

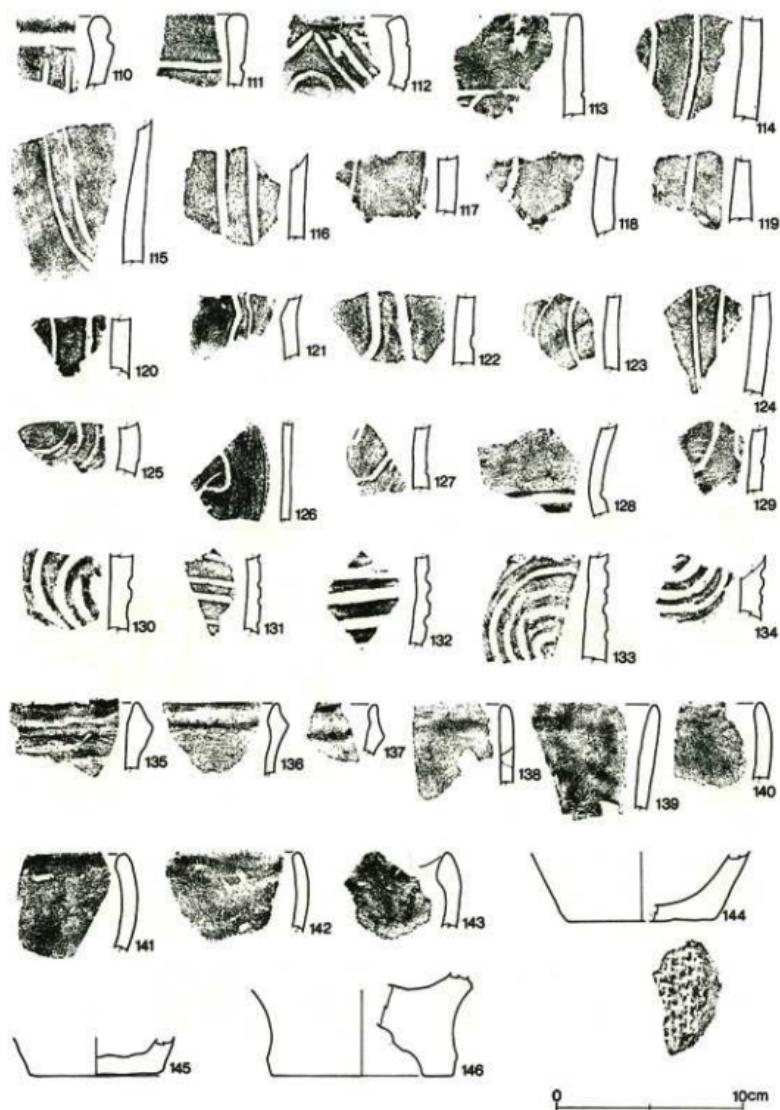
B (第 113 図、第 114 図 1、2、第 119 図、第 120 図) 1 本描きによる C 手法。深鉢 B には円形刺突列、沈線等の I・文様帶が入る。第 119 図 8、9 は R、(R→Ct) が垂下する。深鉢には横



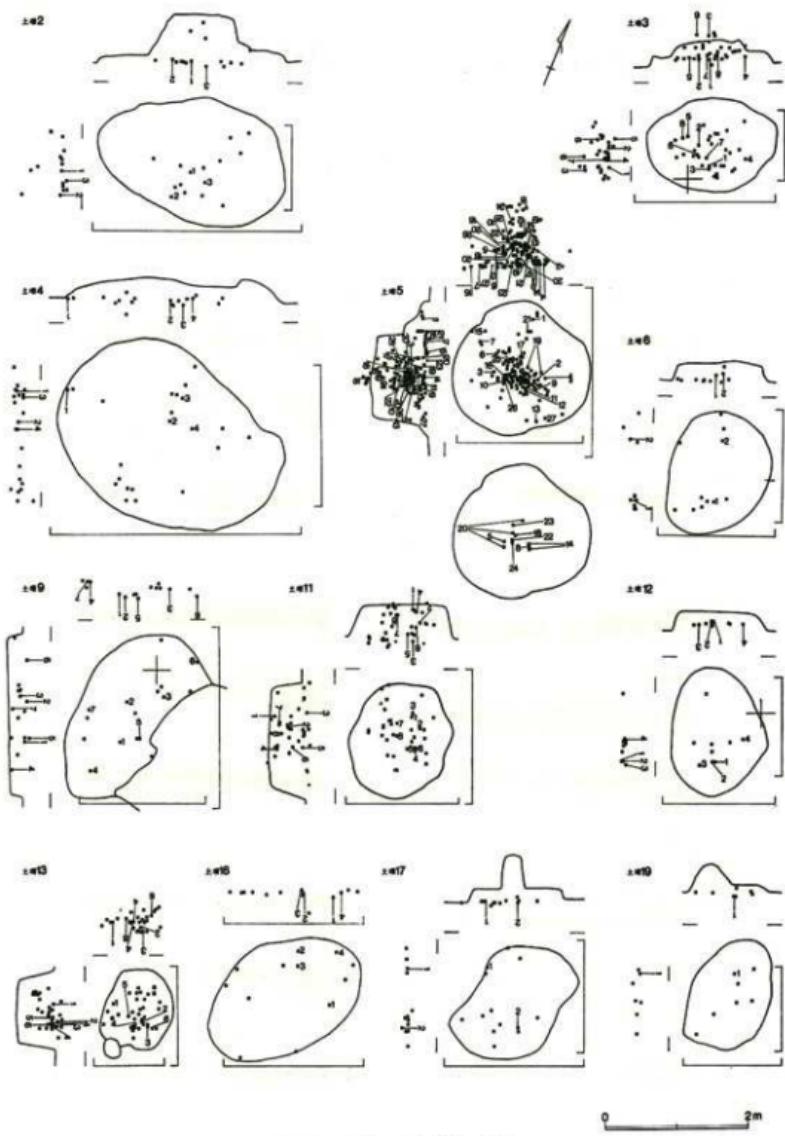
第95圖 土壤出土土器拓影圖 (25) 第60號土壤 (2)



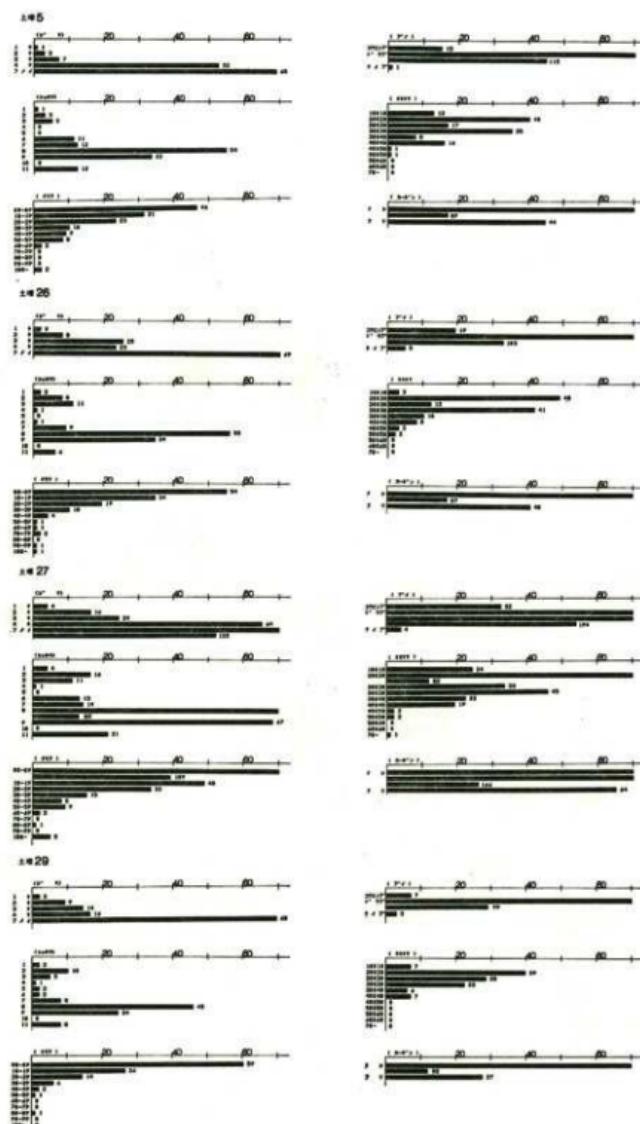
第96図 土壤出土土器拓影図 (26) 第60号土壤 (3)



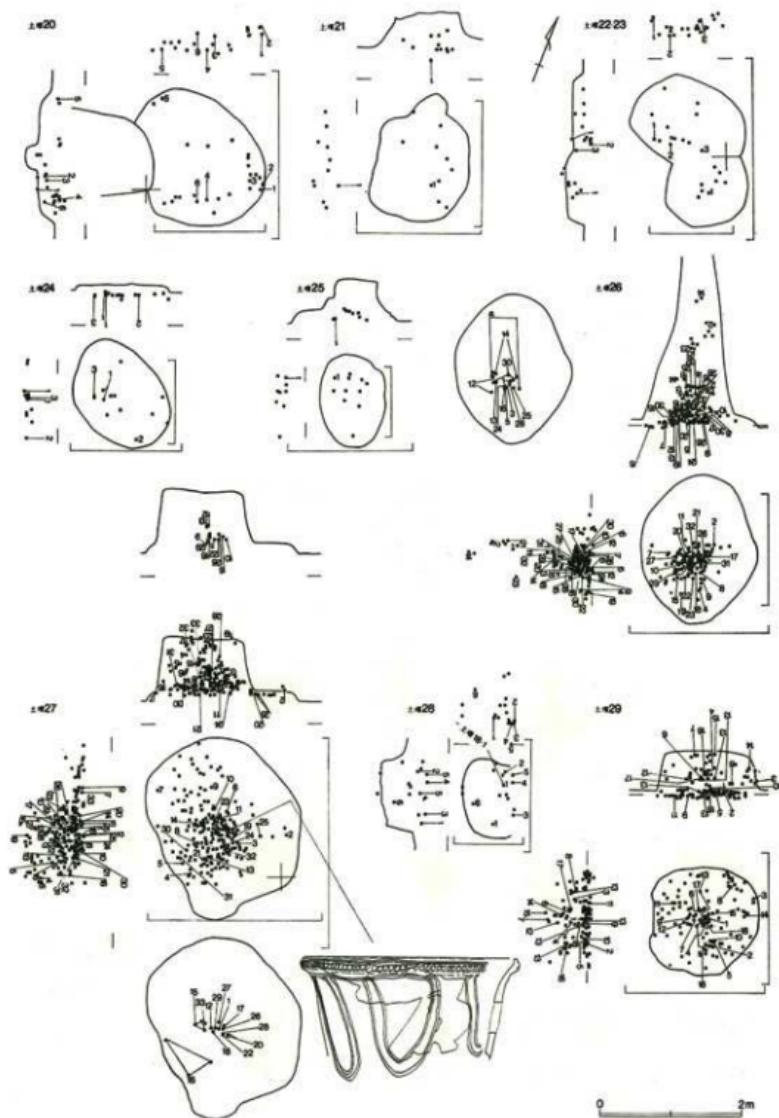
第97圖 土壤出土土器拓影圖 (27) 第60号土壤 (4)



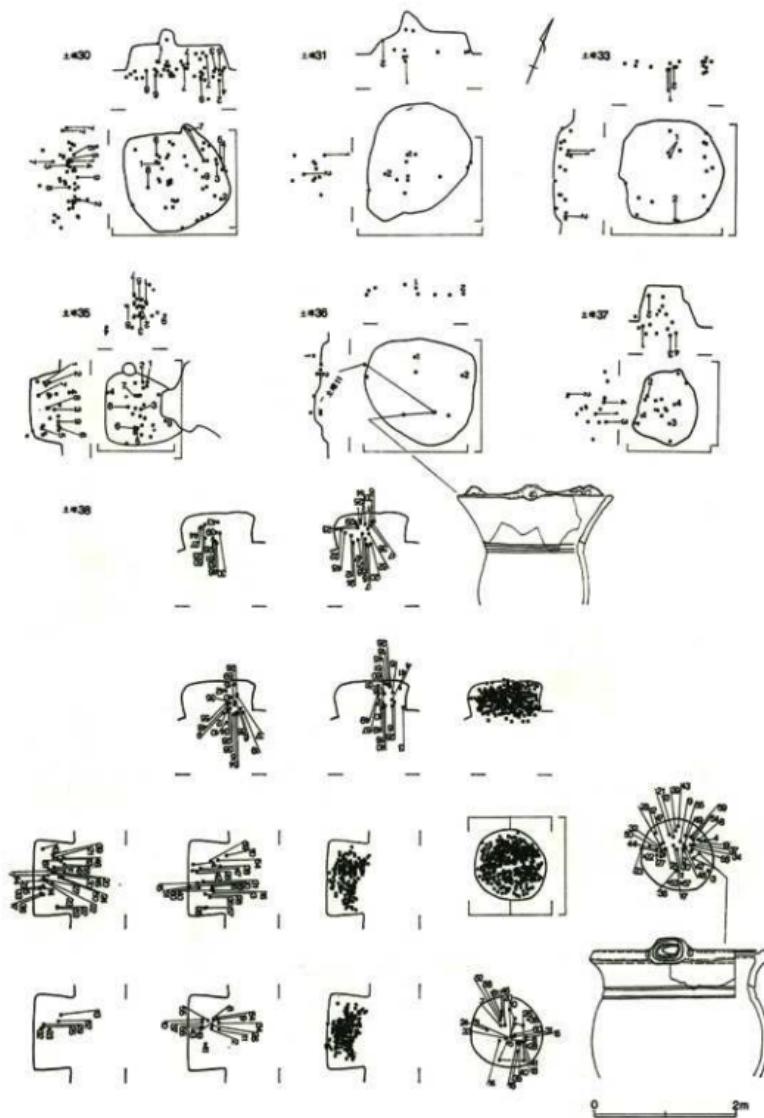
第98図 土壤出土土器分布図(1)



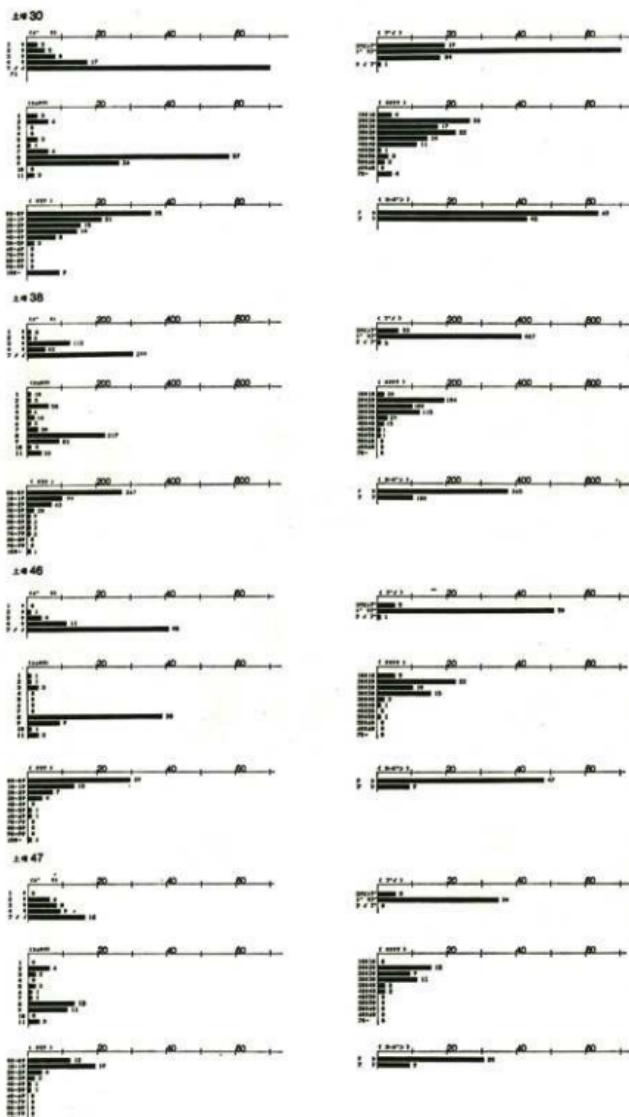
第2表 土壤出土土器構成表(1)



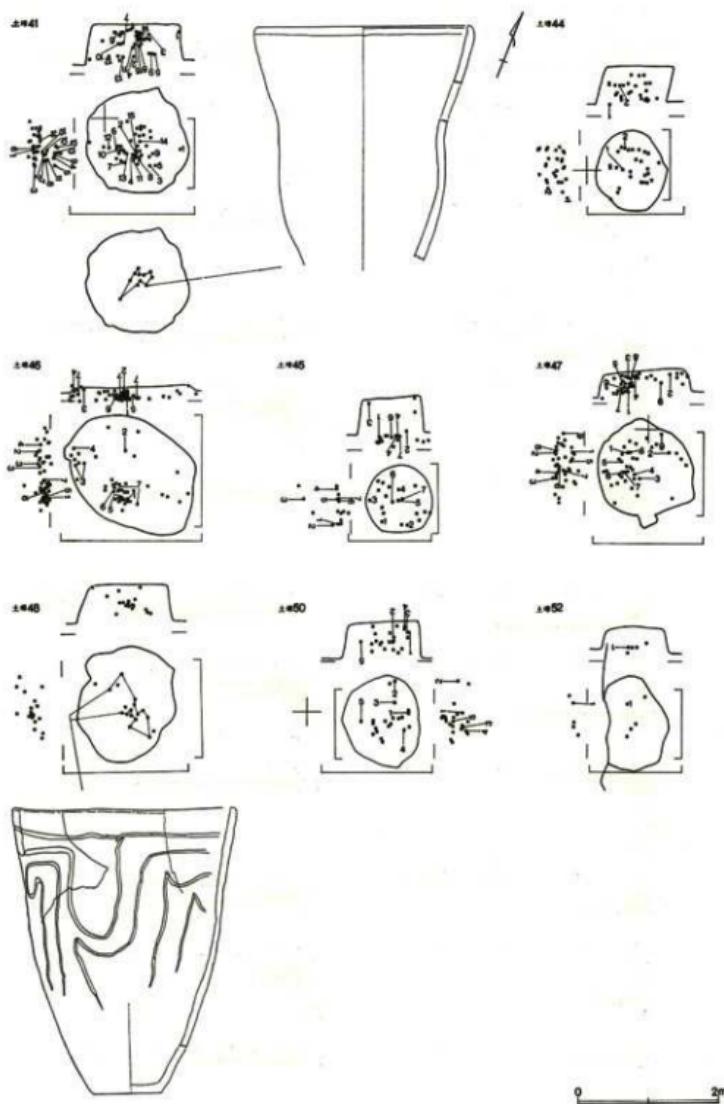
第99図 土壌出土土器分布図(2)



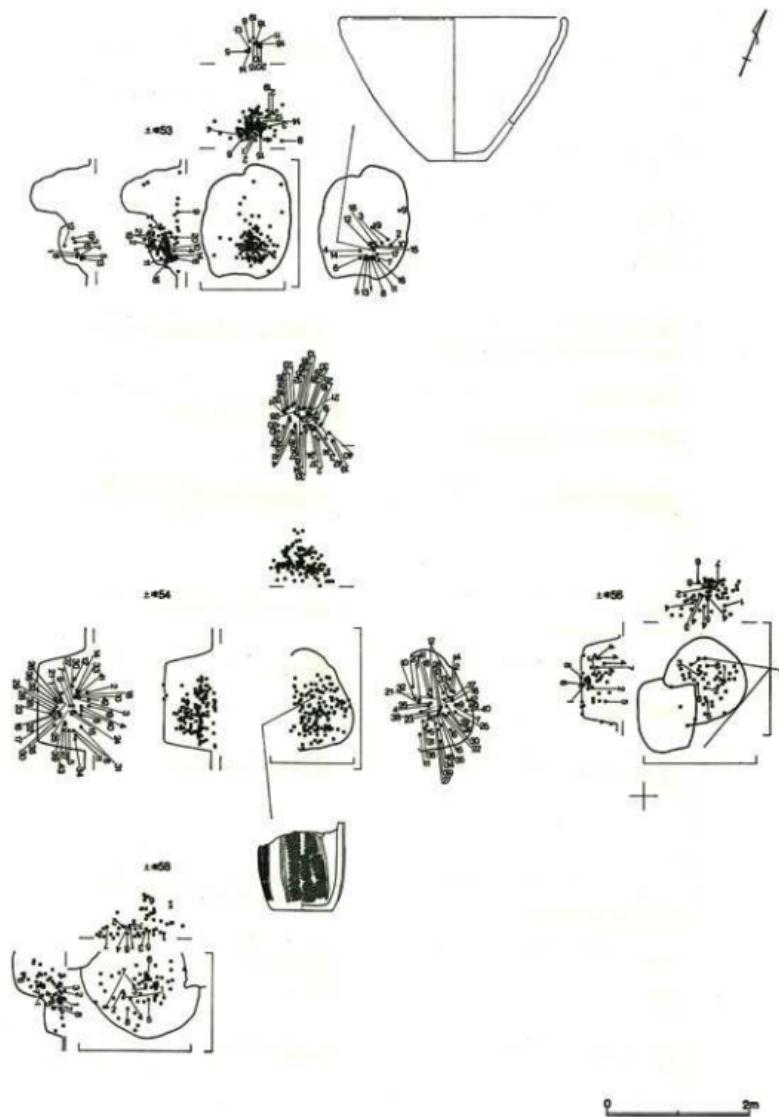
第100圖 土壤出土土器分布圖 (3)



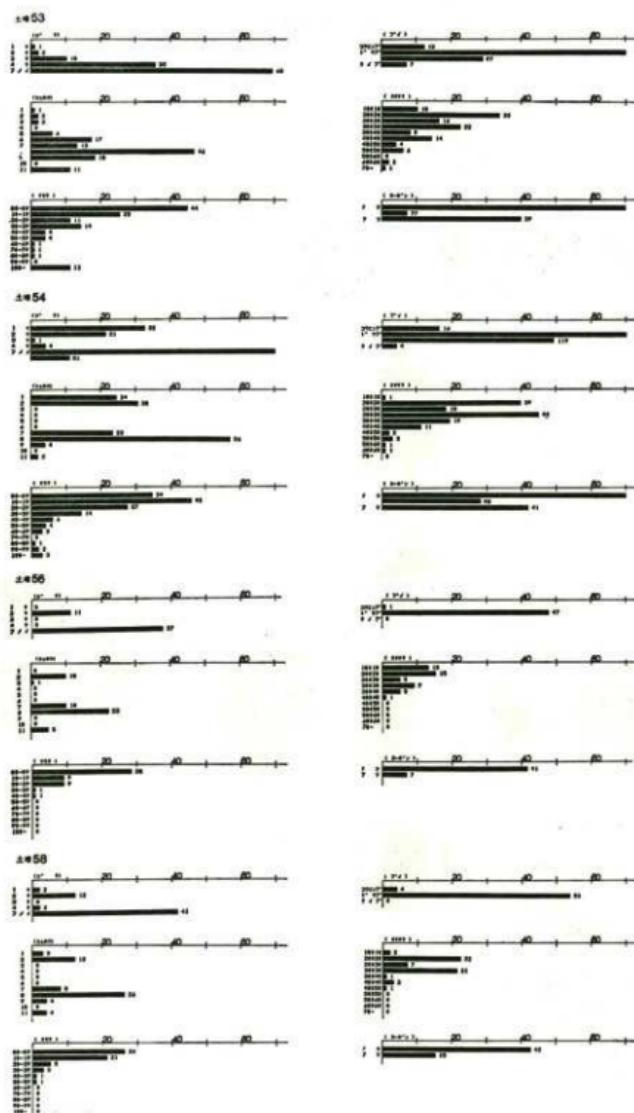
第3表 土壤出土器構成表(2)



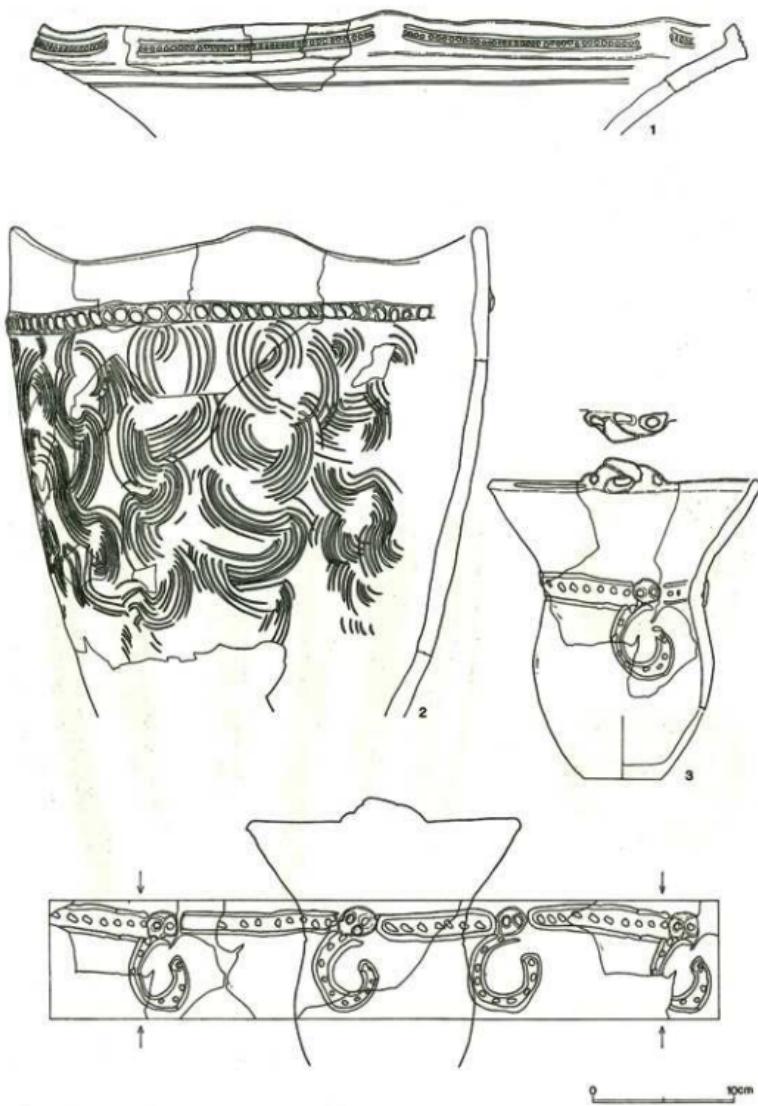
第101図 土壌出土土器分布図 (4)



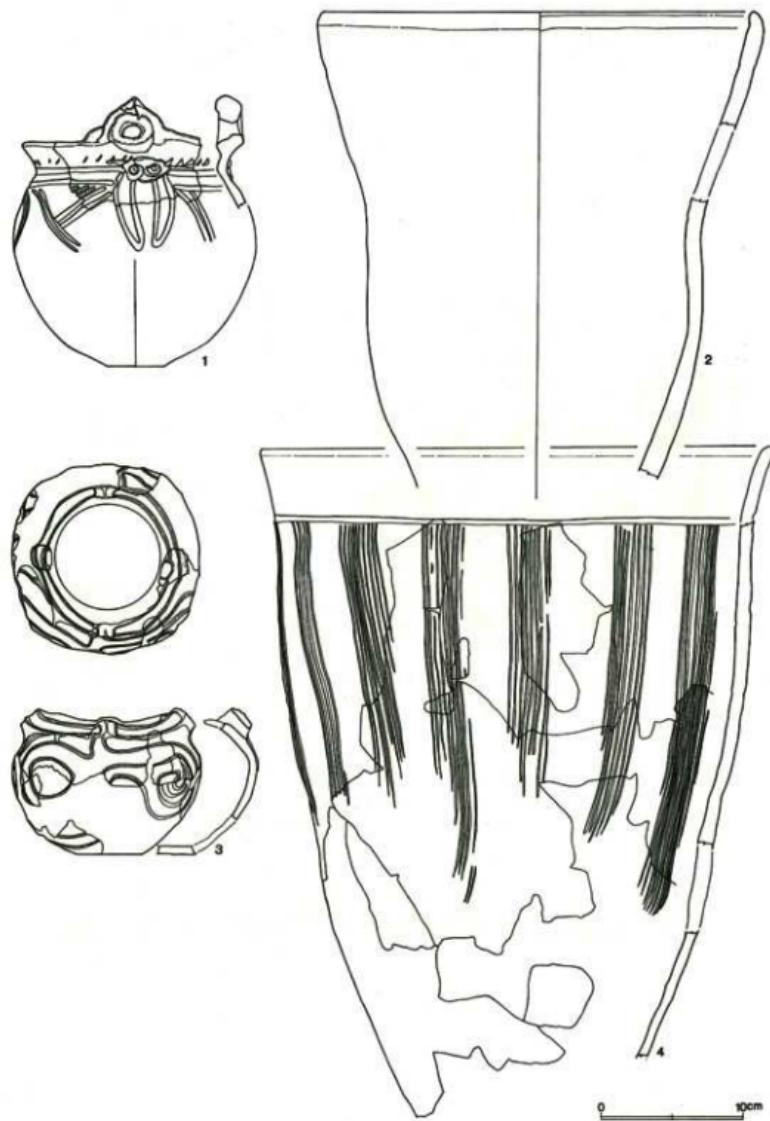
第102図 土壌出土土器分布図 (5)



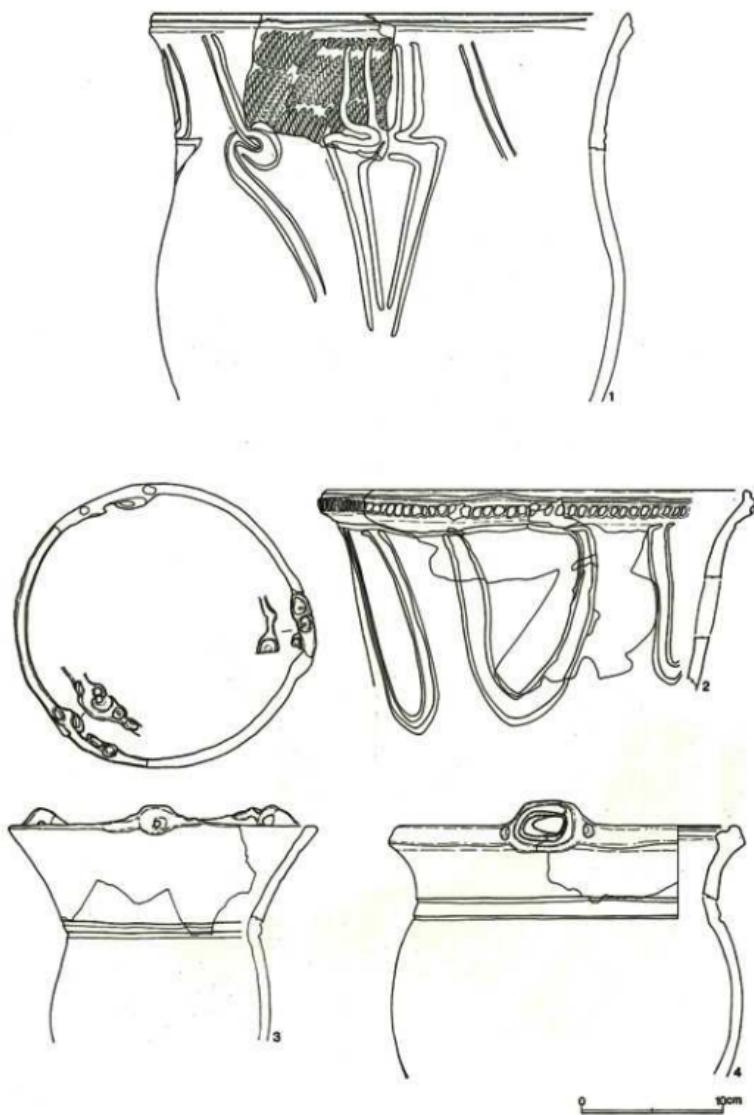
第4表 土壤出土土器構成表(3)



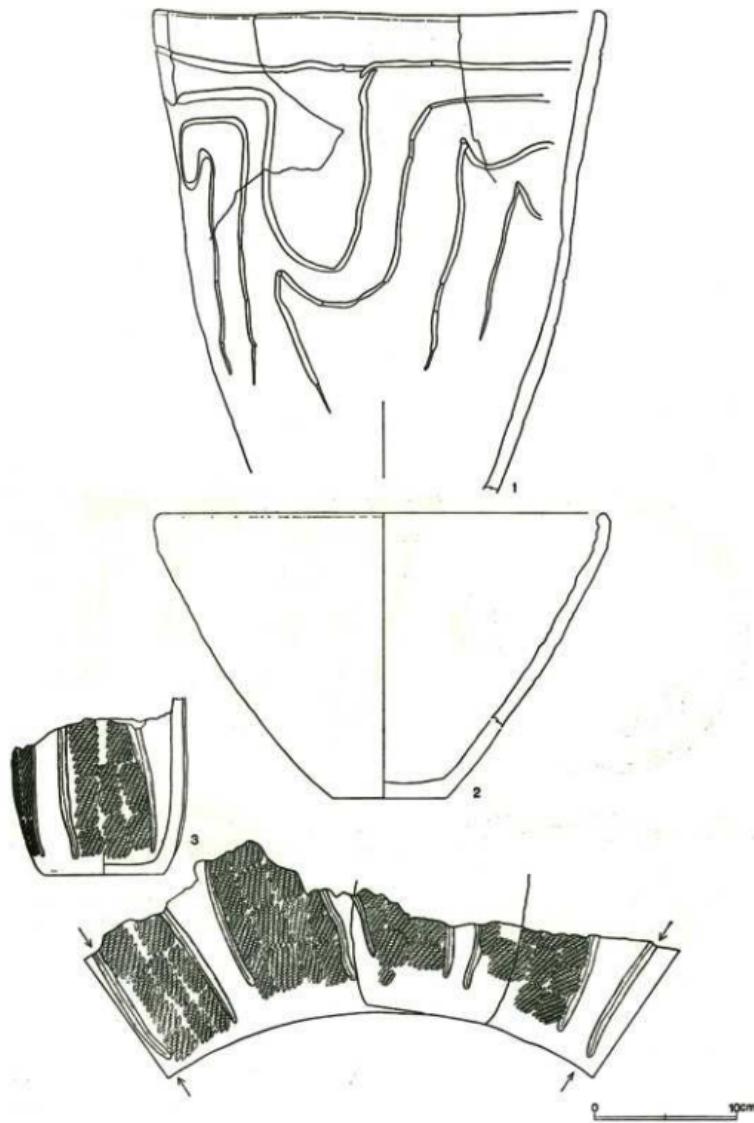
第103圖 造構出土土器実測図（1） 1—第3号住、2、3—第7号住



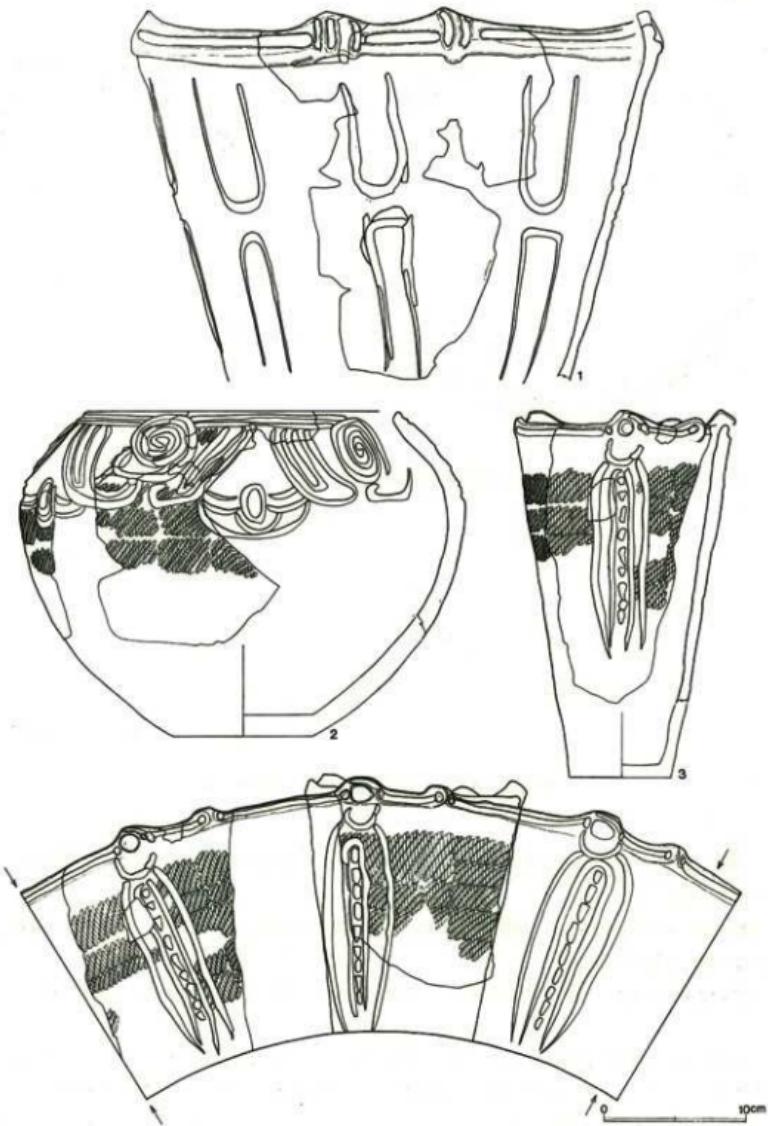
第104図 遺構出土土器実測図(2) 1—第11号住、3—第19号住、4—第21号住、2—第41号土壤



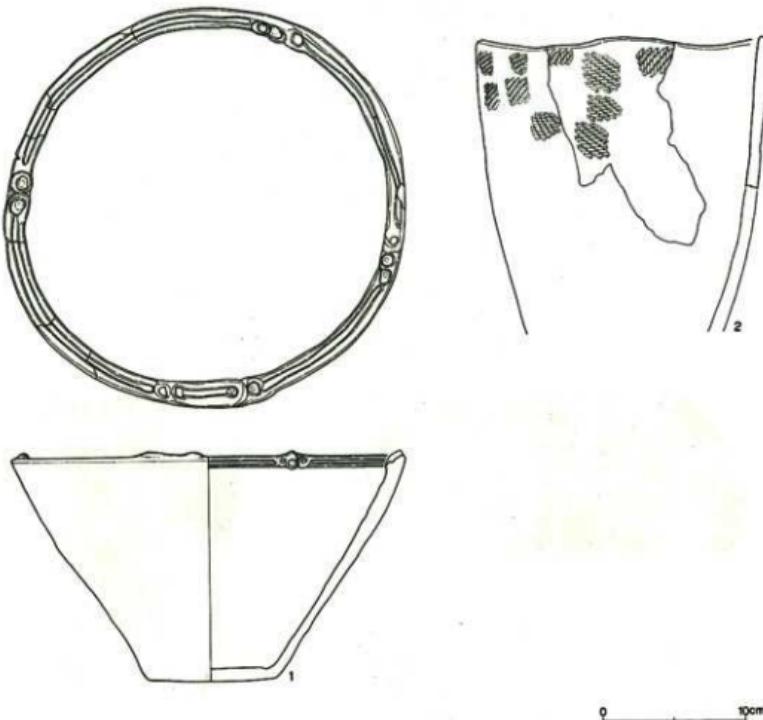
第105図 造構出土土器実測図 (3) 1—第5号土壤、2—第27号土壤、3—第36号土壤、4—第38号土壤



第106圖 遺構出土土器實測圖（4） 1—第48號土壤、2—第53號土壤、3—第54號土壤



第107図 遺構出土土器実測図(5) 第59号土壤



第108図 遺構出土土器実測図（6） 第59号土壤

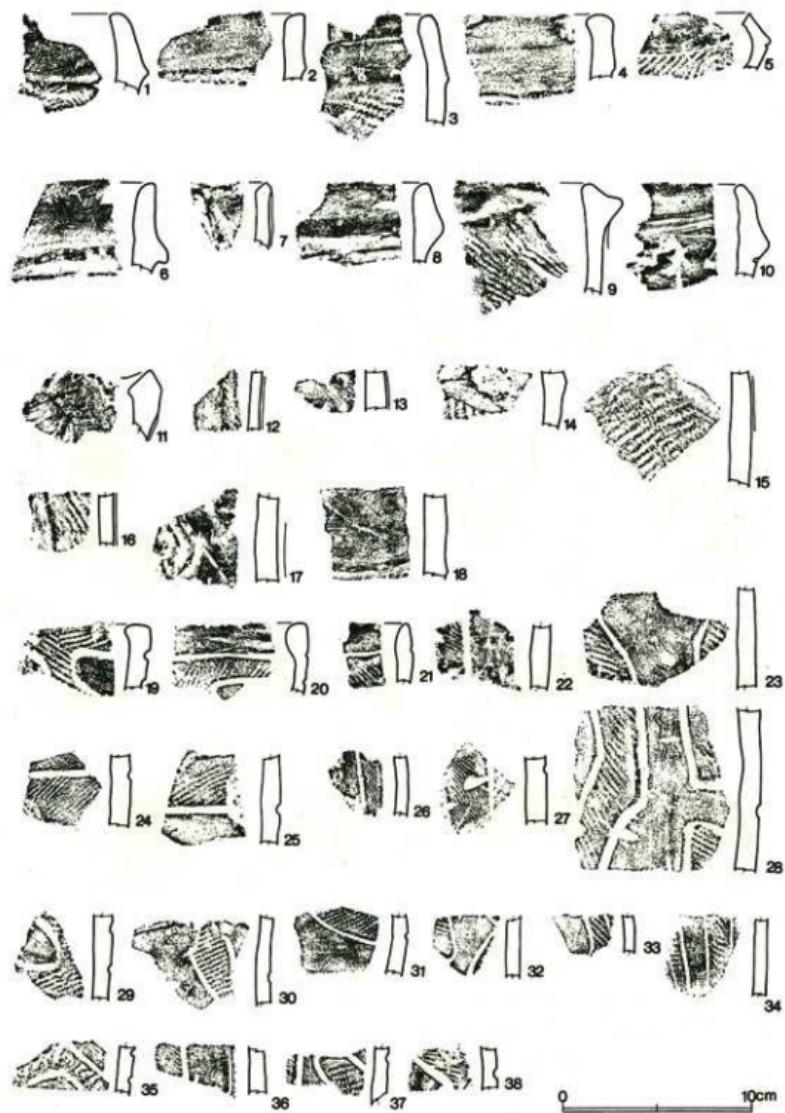
走沈線によって口縁無文部を区画するものと、区画がないものの2種類認められる。胸部文様は1～3本の沈線で描かれる。

第7類（第112図16～22） 橋紋だけが配されるもの。18、19、は附加条的、21、22は縦回転で間隔を開けた施文である。

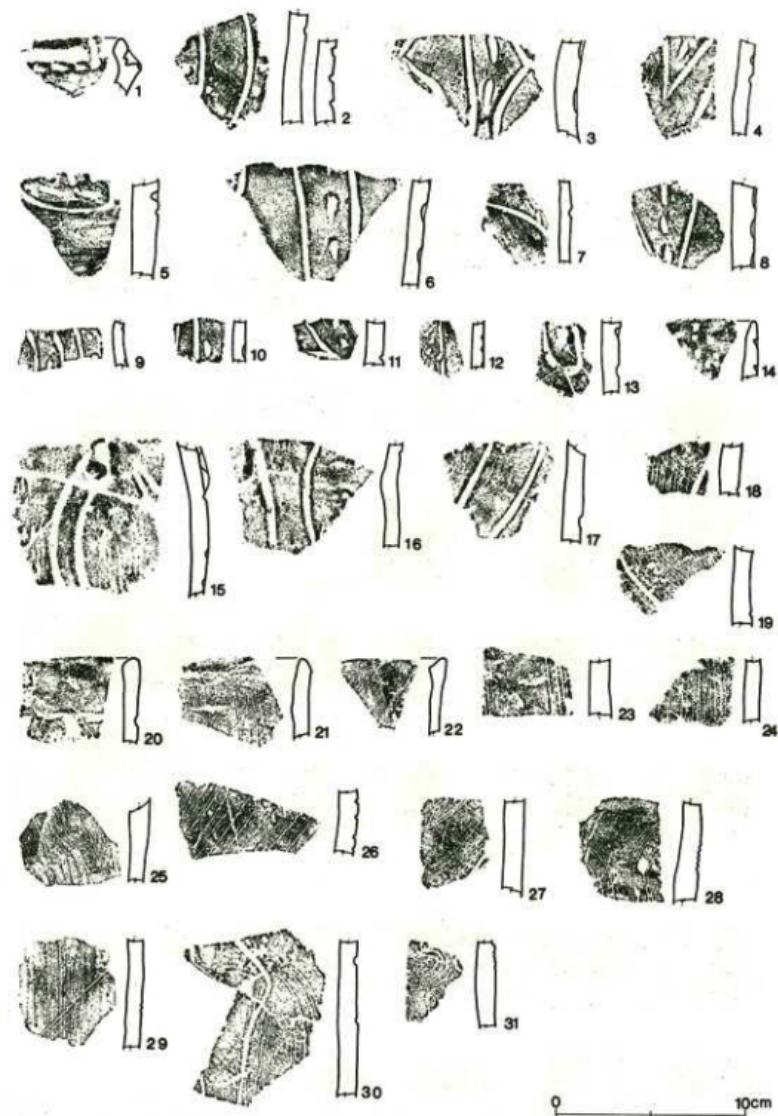
第8類（第I14図3～25、第121図） 口縁無文部片を一括する。第121図26は浅鉢である。

第122図は第6類で深鉢Bである。口径一約26cm、器高一約31.5cm。3単位の波状口縁で盲孔と沈線文による1。文様帯が形成される。屈曲部に2本沈線による区画が入り胸部はJ→C手法による2本組みの同心円文が配される。展開図右側が刺突、3本沈線となり相同性がくずれる。第4期である。

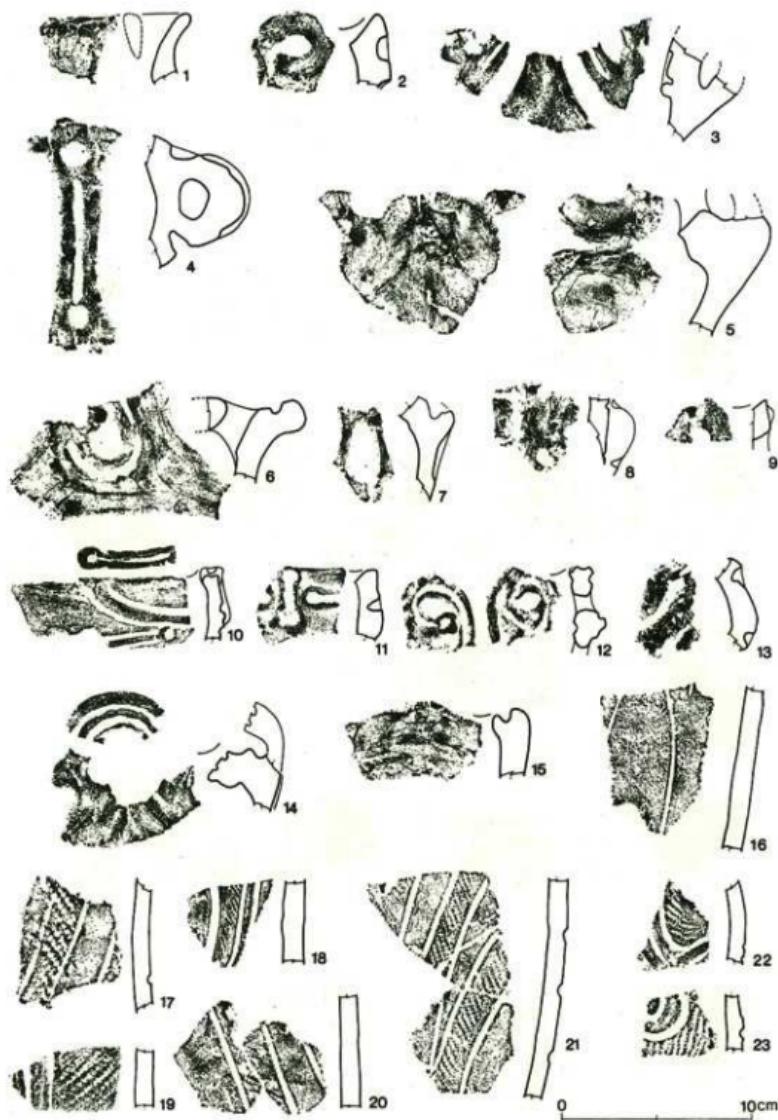
第123図1は第1類でキャリバー状を呈する。4単位波状口縁で頂部に環状の小突起が付き、か



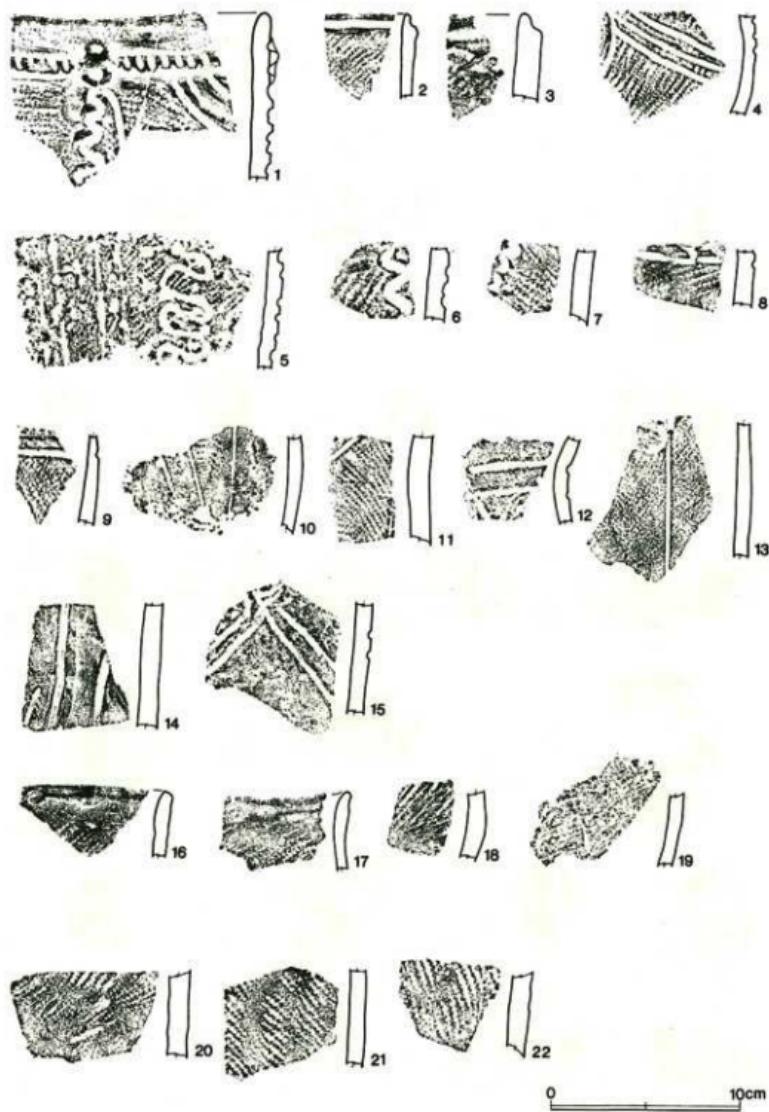
第109図 グリット出土土器拓影図（1）



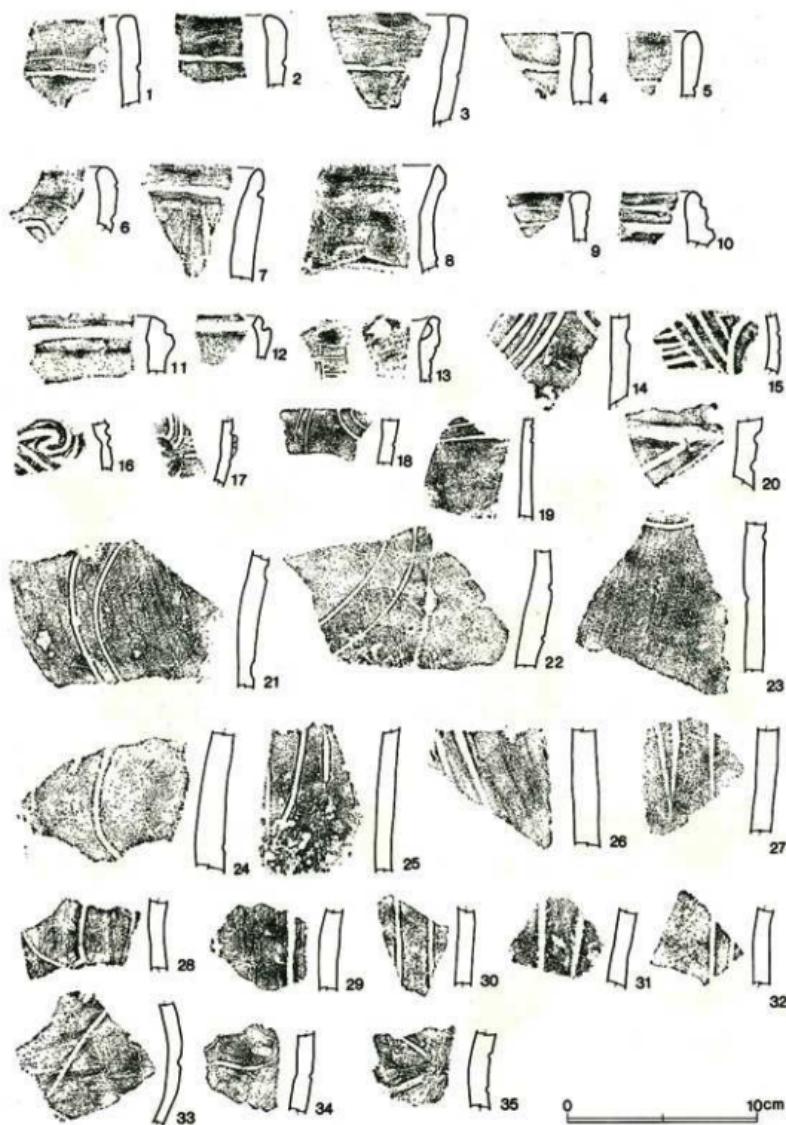
第110図 グリット出土土器拓影図（2）



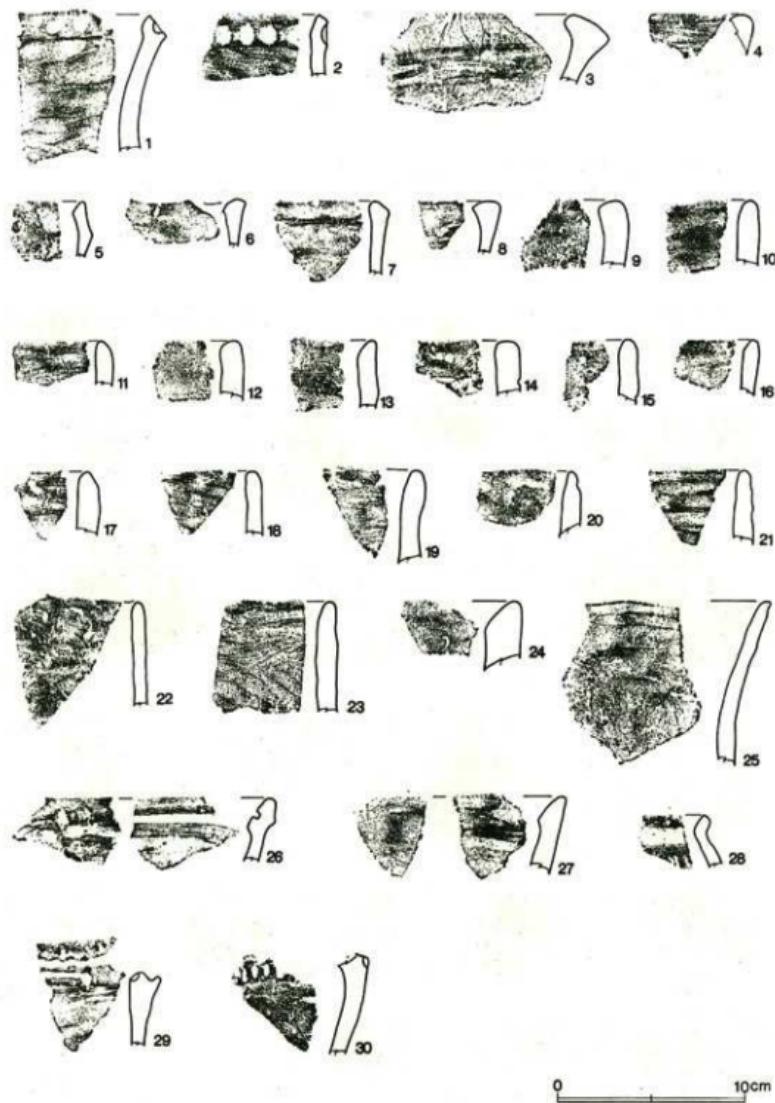
第111図 グリット出土土器拓影図（3）



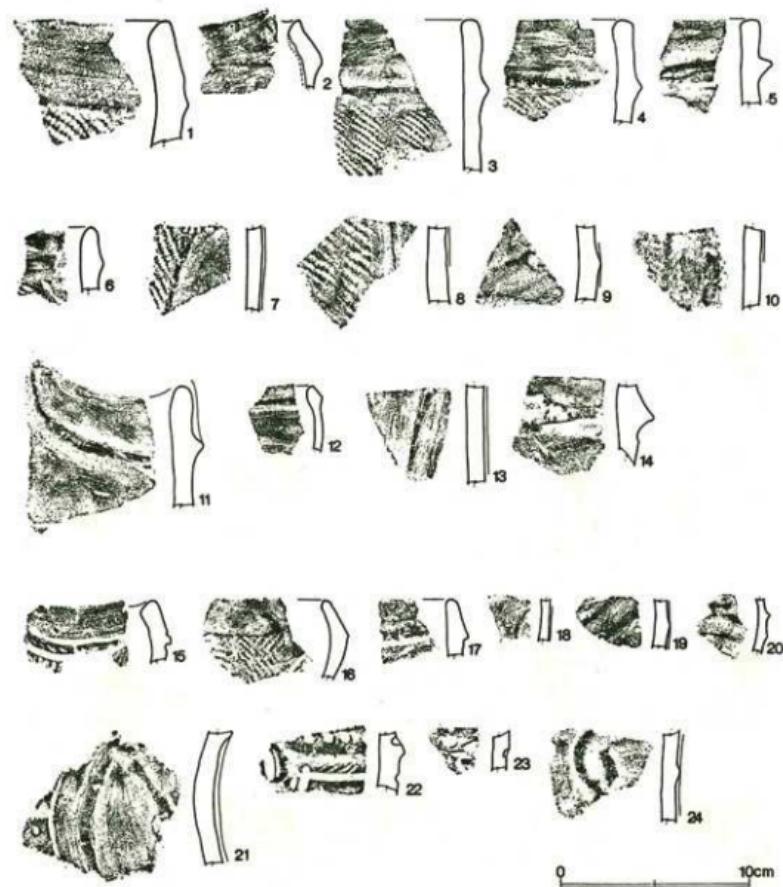
第112図 グリット出土土器拓影図(4)



第113図 グリット出土土器拓影図 (5)



第114図 グリット出土土器拓影図（6）



第115図 グリット出土土器拓影図（7）

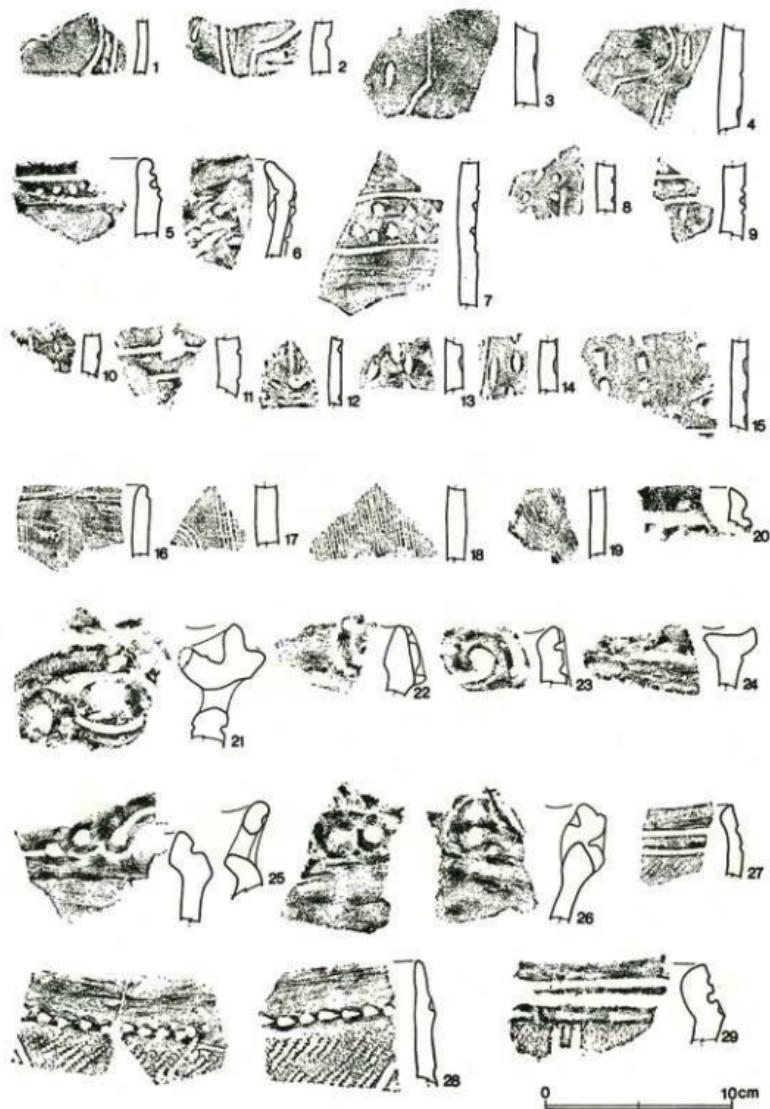
なり内弯する。微隆起線は断面「カマボコ状」を呈する。文様は屈曲部で2分され、上部には小突起と連動する渦文が、下位には隆起線の懸垂文が配される。隆起線の両側に広いナゾリが認められる。

第123図2、大形の橋状把手を有する長胴の壺と相定される。受け口状の口縁部を有する。把手は貫通孔を有し、周囲に「C」字状文が配される。特異な器形である。第3期である。

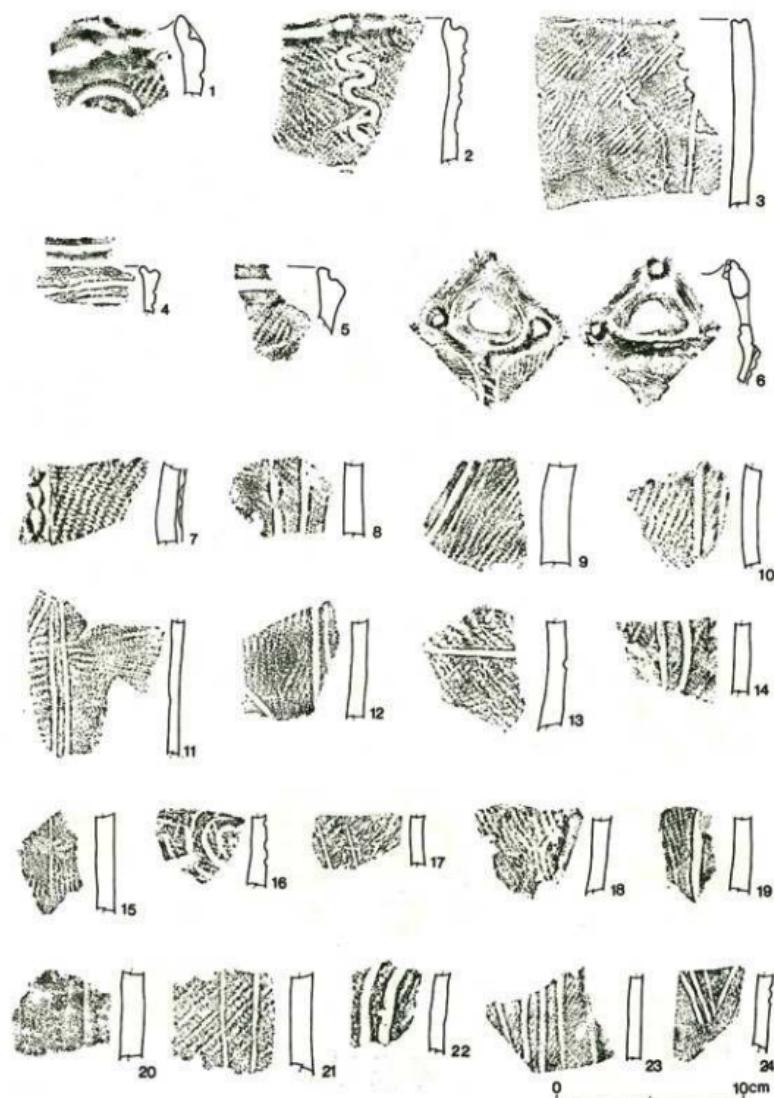
第123図3、胸部で屈曲する深鉢B。一応第6類としておく、4単位の波状口縁と推定される。



第116図 グリット出土土器拓影図(8)



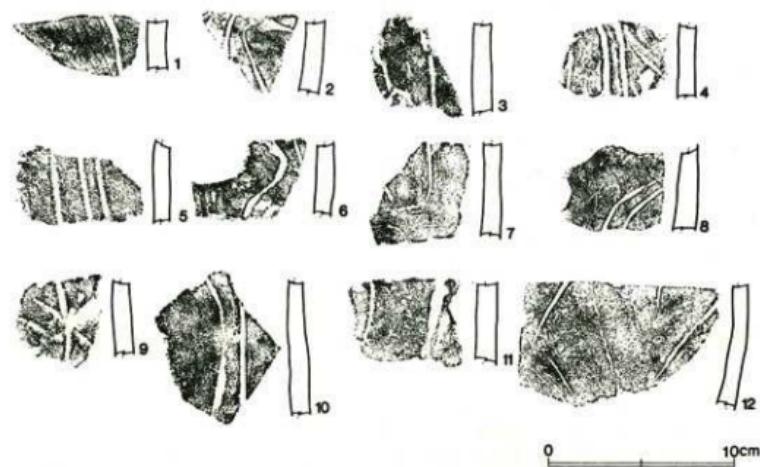
第117図 グリット出土土器拓影図(9)



第118図 グリット出土土器拓影図(10)



第119図 グリット出土土器拓影図(11)



第120図 グリット出土土器拓影図(12)

口縁部に沈線と刺突とによる I・文様帶を有し頸部無文、屈曲部と胴部に2本沈線で区画された I・文様帶を配する。文様は頂部下に蛇行文を配し、構方向に文様が展開する。第4期である。

第123図5、晩期安行III式の甕である。最大径が胴部にあり、上半部に列点文による文様が配される。